## ■9群(電子材料・デバイス)-3編(半導体)

# 2章 応用編

## 2-1 Si

(執筆者:深津 晋) [2010年6月受領]

半導体を代表する Si (硅素) は 14 族 (短周期表ではIV族) 元素の単体であり, エレクト ロニクス産業にとって欠くべからざる物質である.既存の半導体では最も高純度 (15 N: 99.999999999999) な単結晶が精製できる.最大 30 cm 径の半導体グレード (SEG:11 N) か ら主に太陽電池をターゲットとするソーラーグレード (SOG:7 N) まで多様な単結晶基板が 比較容易に入手できることから,弱電,強電用途にとどまらず,汎用基板,赤外光学窓,マ イクロマシンなどに利用される. pn 接合ダイオードなどディスクリート部品から Si あるい は SOI (Silicon-On-Insulator) 基板上に形成した大規模集積回路 (LSI) らが実用に供してい る.

ー方, Si の酸化物(SiO<sub>2</sub>)は、金属酸化膜半導体電界効果トランジスタ(MOSFET)の ゲート絶縁層として卓越した性質を示すが、これが Si をエレクトロニクスの中心的存在に押 し上げた要因のひとつでもある.近年は、Si と SiO<sub>2</sub>ないしは Si と空気との高い屈折率コン トラストを利用した SOI 導波路が光技術と電子技術の融合の観点から注目されている(シリ コンフォトニクス).一方,超高真空環境で得られる Si(111)清浄表面は、再配列した原子が 特徴的な幾何学パターン(7×7構造)を示すことから表面科学のベンチマークとして頻繁に 利用される.

### 2-1-1 Si の結晶構造と物理定数

Si は常温,常圧下でダイヤモンド構造(面心立方格子を $\left\langle\frac{1}{4}\frac{1}{4}\right\rangle$ だけ並進させた $O_h^7(Fd3m)$ 対称性の構造)をとる.高圧下では $\beta$ -スズ(金属)相に転移することが知られている.以下に 主な物性値をのせる(Tは絶対温度)<sup>1),2)</sup>.

格子定数〔mm〕	$a = 0.54304 + 1.8138 \times 10^{-5}$	$(T-273)+1.542\times10^{-9}(T-273)$	<sup>7</sup> 3) <sup>2</sup> (300 K< <i>T</i> <1100 K)
線膨張係数	$\alpha = 2.56 \times 10^{-6} [K^{-1}]$ (	T = 22.50 °C)	
密度	$\rho = 2.329 \ [g \ cm^{-3}]$ @	298 K	
融点	$T_m = 1687$ [K]		
熱伝導率	$\kappa = (0.1598 + 1.532 \times 10^{-3})$	$(+1.65 \times 10^{-6} T^2)^{-1} [W/cm]$	$^{-1}K^{-1}$ ]
デバイ温度	$\Theta_{\rm D} = 636 \ [\rm K] \qquad @ 0 \ \rm K$		
弾性定数(GPa)	$c_{11} = 160.1$ $c_{12} = 57.3$	$c_{44} = 80.0$	
フォノンのエネルギ	ー 〔cm <sup>-1</sup> 〕 (光学遷移に)	は∆点フォノンが関与)	
ν <sub>(TL)O</sub> (Γ)=520	<i>v</i> <sub>TO</sub> (X)= 449.6	$v_{\text{LO},\text{LA}}(X) = 405.6$	<i>v</i> <sub>TA</sub> (X)= 148.4
$v_{\rm TO}(\Delta) = 464.5$	$v_{\rm LO}(\Delta) = 448.2$	<i>ν</i> <sub>LA</sub> (Δ)=375.7	$v_{TA}(\Delta) = 147.0$
	v <sub>TO</sub> (L)= 469.0	$v_{\rm LO}(L) = 419.6$	$v_{\rm LA}(L) = 360.6$
ν <sub>TA</sub> (L)= 111.7			
音速〔×10 <sup>3</sup> m/s〕 @	9298K		
	縦波//[001] 8.43	横波//[110] 5.84	
	縦波//[110] 9.13	横波//[001] 5.84	横波//[110] 4.67

縦波/[111] 9.36 横波⊥[111] 5.10
劈開面 {111} (実際はエネルギーの近い {110} でも劈開が容易)
移動度 [cm²/Vs] @300 K (キャリア濃度 <10<sup>15</sup> cm<sup>-3</sup>)
電子 μ=1350 正孔(ホール) μ=370

### 2-1-2 Si のバンド構造と電子状態

Si は間接遷移型半導体の典型であり,図2・1のようなバンド構造をもつ<sup>3)</sup>.価電子帯頂上は Brillouin ゾーンの中心(Γ点(0,0,0))にあるが,伝導帯底は $\Delta$ 点[(0.853,0,0) $\frac{2\pi}{a}$ ]で6重に縮退したバレー(挿入図)を形成する.間接バンド端( $\Gamma_{25v} - \Delta_1$ )の電気双極子による光学遷移(1次摂動)は禁制であり,フォノン散乱やポテンシャル散乱(非フォノン遷移)を介した2次摂動が働くとはじめて双極子許容となる.直接ギャップ( $\Gamma_{25v} - \Gamma_{2c}$ )は紫外域( $\approx$ 4 eV)にある.Si は無極性であるため電子格子相互作用は変形ポテンシャルで記述される.



図 2・1 Siのバンド構造(擬ポテンシャル法)

バンド構造に関する主な物性値を以下に記す(m<sub>0</sub>は電子の静止質量)<sup>1),2)</sup>.  $E_{g}^{ind}(T) = 1.17 - 4.73 \times 10^{-4} T^{2}/(T+636)$  [eV]  $E_{\varphi}^{dir}(T) = 4.34 - 3.91 \times 10^{-4} T^{2} / (T+125) \text{ [eV]}$ スピン軌道(SO)分裂 A<sub>0</sub>=0.04 [eV] 有効質量 電子  $m_i = 0.191 m_0$ ,  $m_i = 0.916 m_0$ 重い正孔 m<sub>bb</sub>=0.537 m<sub>0</sub> 軽い正孔 m<sub>b</sub>=0.153 m<sub>0</sub> SO 結合に分裂バンド(正孔)  $m_{SO} = 0.234 m_0$ 変形ポテンシャル(代表値のみ)〔eV〕  $\Xi_u = 9.2$   $\Xi_d = 5$   $a(\Gamma_{15c}) = -10.0$ 伝導帯 b = -2.2 d = -5.1  $a(\Gamma_{25'\nu}) = -10.2$ 価電子帯 輻射再結合(B)係数  $1.1 \times 10^{14}$  [cm<sup>3</sup>s<sup>-1</sup>]  $1.4 \times 10^{30} \text{ [cm}^{6} \text{s}^{-1}\text{]}$ Auger 係数( $C_n+C_n$ )

## 2-1-3 Si の光学定数

Si の屈折率と消衰係数のスペクトルを図 2・2 に示す.  $\Gamma_1(\Gamma_{25\nu} - \Gamma_{15c})$  遷移 (3.4 eV) 以下で 屈折率は正常分散を示す. 二光子吸収は  $0.5E_g < E < E_g$  で重要となる. 二光子吸収係数やラマ ン利得などは,三次非線形光学定数 (O( $10^{-12}$ ) esu) の虚部 Im{ $\chi^{(3)}$ } に, 一方,光カー効果 (光強度依存屈折率),位相変調効果などは Re{ $\chi^{(3)}$ } に含まれる.



**図2-2** Siの屈折率 n と消衰係数 k

以下,主な光学定数を記す1),2).

屈折率 @300 K n=3.419+0.159906/( $\lambda$ -0.028)-0.01231/( $\lambda$ -0.028)<sup>2</sup>+1.2688  $\lambda$ <sup>2</sup>-1.9510  $\lambda$ <sup>4</sup> 誘電定数 11.7 二光子吸収 (TPA)係数 1.5 [GW<sup>-1</sup>cm<sup>-1</sup>] @1.06  $\mu$ m, 100 K 自由キャリア吸収 (FCA)係数 ( $\lambda$ >5 $\mu$ m)  $\alpha$  = (1.0×10<sup>18</sup> n + 2.7×10<sup>18</sup> p)× $\lambda$  ( $\mu$ m)<sup>2</sup> [cm<sup>-1</sup>]

- The Landolt-Börnstein Database Group III Condensed Matter, III/41a1a, b "Semiconductors- Group IV Elements, IV-IV and III-V Compounds" Part a, b (本編未掲載の物性データが参照可) URL: www.springermaterials.com/navigation/bookshelf.html
- 2) URL: www.ioffe.ru/SVA/NSM//Semicond/Si/(物性データが図表,文献とともに公開されている)
- 3) J. R. Chelikowsky and M. L. Cohen, Phys. Rev. B, vol.14, p.556, 1976.

## 2-2 Ge, SiGe

(執筆者:深津 晋) [2010年6月受領]

Ge は 14 族の元素半導体であり、エレクトロニクス黎明期にはおおいに活躍した. 小信号 ダイオードなど一部の用途を除けば、現在ではほとんどが Si に置き換わっているが、最近に なって Ge あるいは歪を印加した Ge の高い移動度が見直されつつある. 更に、Ge は Si より もバンドギャップが小さいことから光通信帯や汎用の近赤外検出デバイスに、また大きな屈 折率 (n=4)を活かして赤外領域の光学材料やファイバコアの添加剤としても利用される. 一方、Si<sub>1-x</sub>Ge<sub>x</sub> ( $0 \le x \le 1$ )(または Si<sub>x</sub>Ge<sub>1-x</sub>)は Ge が同族の Si の(あるいはその逆の)格子 位置原子を一部置換した混晶(または合金)であり、任意の混晶比で置換可能である(全率 固溶). Si<sub>1-x</sub>Ge<sub>x</sub>混晶のバルク結晶や基板は一般には入手できないが、Si あるいは Ge 基板上の エピタキシャル薄膜として得ることができる. この際、基板との格子不整合(Ge と Si で約4%) の影響で、例えば Si 上の Si<sub>1-x</sub>Ge<sub>x</sub>薄膜には面内の圧縮応力が加わる. Si (Ge) 基板から Ge 組成 を漸増(漸減)させることで歪が緩和した Si<sub>1-x</sub>Ge<sub>x</sub>混晶の厚膜は、最上層の混晶比(y)をも

つ仮想基板として利用できる.再成長層の混晶比を zとして、 $\{z>y\} \rightarrow \{z<y\}$ に応じて成長層 面内の歪が「圧縮→伸張」へと切り替わり、バンド端のシフト・分裂が制御可能となる(バ ンド工学). Si<sub>1x</sub>Ge<sub>x</sub>混晶をベース層に用いたヘテロ(接合)バイポーラトランジスタ(HBT) が実用化されている.

### 2-2-1 SixGe1-xの結晶構造と物理定数

バルク Si<sub>x</sub>Ge<sub>1x</sub>( $0 \le x \le 1$ ) は常温,常圧下で C, Si と同じダイヤモンド構造 ( $O_h^2(Fd_3m)$ ) 対称 性) をとる. 固液曲線の特徴から「引き上げ法」によって大きな混晶比 (x) の均一結晶を得 ることは難しい. 以下に Si<sub>1x</sub>Ge<sub>x</sub>混晶の物性値を示すが,概ね x を用いた線形補間ないしは放 物線でよく近似できる<sup>1).2)</sup>. x=0.85 前後の変化は,バンド端の遷移 ( $\Delta \rightarrow L$ ) にともなう効果 (次節参照).

格子定数	$a = 0.5431 + 0.020x + 0.0027x^2 \text{ [nm]}$	@ 300 K
線膨張係数	$\alpha = (2.56 + 2.55x) \times 10^{-6} [K^{-1}] (0 \le x \le 0.85)$	@ 300 K
	$\alpha = (-0.89+7.53 x) \times 10^{-6} [(K^{-1}] (x \ge 0.85)$	@ 300 K
密度	$\rho = 2.329 + 3.493x - 0.499x^2 \text{ [g cm}^{-3}\text{]}$	@ 300 K
融点 T(固相	)=1139 - 738 $x$ +263 $x^2$ ; $T(液相)$ =1139 - 80 $x$ -	$395x^2$ @ 300 K
熱伝導率	$\kappa \approx 0.046 + 0.084x \; [W/cm^{-1}K^{-1}] \; (0.2 \le x \le 0.85)$	@ 300 K
	$\kappa$ (Ge) = 0.36 [W/cm <sup>-1</sup> K <sup>-1</sup> ]	
デバイ温度	$\Theta_{\mathrm{D}}=640-266x \ [\mathrm{K}]$	
弾性定数(GPa)	$c_{11} = 165.8 - 37.3x$ $c_{12} = 63.9 - 15.6x$ $c_{44} = 79.6$	–12.8x @300 K
ラマン散乱に関与す	るΓ点フォノンのエネルギー〔cm <sup>-1</sup> 〕	
$v_{(LT)O}(\Gamma)$ : 5	20 - 71.8x (Si-Si); $\approx 410$ (Si-Ge); 288+16.5x	(Ge-Ge)
光学遷移 $(x \ge 0.85)$	に関与する Ge 類似の L 点フォノンのエネルギ	₩— [cm <sup>-1</sup> ]
$v_{\rm TO}(\rm L) = 29^{\circ}$	7.1 $v_{\rm LO}(L) = 250.0$ $v_{\rm LA}(L) = 229.4$ $v_{\rm TA}(L) = 6$	4.4
移動度	電子 $\mu = 3900$ 正孔 $\mu = 1900$ [cm <sup>2</sup> /Vs]	@300 K

二次元電子(Si チャネル, Si<sub>1</sub>,Ge, 混晶障壁) μ>10<sup>5</sup> @1.5 K

### 2-2-2 Ge のバンド構造と SiGe のバンドギャップ

Ge のバンド構造は間接遷移型で L 点 ( $k = (l,l,l)2\pi/a$ ) に 8 重に縮退した伝導帯バレーをも つ. 無歪の Si<sub>1x</sub>Ge<sub>x</sub>混晶は0 ≤  $x \le 0.85$ で Si,  $x \ge 0.85$ では Ge に類似したバンド構造をとる. その結果, バンドギャップ  $E_g^{ind}$ は Ge 混晶比 x の関数として図 2·3 の ↓ うに変化する. 一 方, 圧縮歪を受ける Si(001) 基板上の Si<sub>1x</sub>Ge<sub>x</sub>混晶は, 0 ≤  $x \le 1$  全域で Si 類似のバンド構造を とる. 伝導帯端は図 2·4 に示すように 4 重縮退の $\Delta_4$ バレーと 2 重縮退の $\Delta_2$ バレーに分裂し, 前者がエネルギー極小を形成する (図 2·3 の ▲).



**図 2・3** 無歪 Si<sub>1-x</sub>Ge<sub>x</sub> 混晶のバンドギャップの混 晶比依存性 <sup>1), 3)</sup>.

(Si との整合性から 1)を+ 90 meV シフト)

 $\Delta E_{c}^{ave} = \frac{\frac{2}{3}\Xi_{u}^{\Lambda}(\varepsilon_{zz} - \varepsilon_{xx})}{-\frac{1}{3}\Xi_{u}^{\Lambda}(\varepsilon_{zz} - \varepsilon_{xx})}$ 

**図2・4** 圧縮歪 Si<sub>1-x</sub>Ge<sub>x</sub>混晶の伝導帯バ レーの応力シフト・分裂

以下,主要	な物性値をあげる	1), 2), 3)
バンドギャ	ップ [eV] [Ge]	
$E_{\rm g}^{\rm in}$	$^{\rm nd}(T) = 0.7412 - 4.5$	$561 \times 10^{-4} T^2 / (T + 210)$
$E_{g}^{d}$	ir(T) = 0.8893 - 6.8	$42 \times 10^{-5} T^2 / (T + 398)$
[無歪 Si <sub>1-x</sub> G	$e_x$ ] @300 K	
$E_{\rm g}^{\rm in}$	$^{nd}(x) = 1.12 - 0.41x$	$x + 0.0008x^2$ ( $0 \le x \le 0.85$ )
$E_{\rm g}^{\rm in}$	$^{\rm nd}(x) = 1.86 - 1.2x$	$(x \ge 0.85)$
[Si(001) 基相	坂上の圧縮歪 Si <sub>1-x</sub> C	Ge <sub>x</sub> ]
$E_{\rm g}^{\rm in}$	$^{\rm nd}(x) = 1.171 - 0.73$	x + 0.2x <sup>2</sup> (▲ <sup>3)</sup> のフィッティング)
有効質量	電子(L6c)	$m_t = 0.082 \ m_0,  m_l = 1.59 \ m_0  (x \ge 0.85)$
	電子( $\Delta_{1c}$ )	$m_t = 0.19 \ m_0,  m_l = 0.916 \ m_0  (0 \le x \le 0.85)$
	重い正孔 [Ge]	$m_{hh} = 0.33 m_0$ 軽い正孔 [Ge] $m_{lh} = 0.043 m_0$
SO 分裂正孔	バンド	$m_{SO} = (0.23 - 0.135x) m_0$
スピン軌道会	分裂	$\Delta_0 (\Gamma_{7v'} - \Gamma_{6v'}) = 0.282 \ [eV]$
輻射再結合(	(B)係数 [Ge]	$6.4 \times 10^{14} \ (\text{cm}^3 \text{s}^{-1})$

## 2-2-3 Ge, SiGe の光学定数

Ge は Si 透明波長域での光検出器として利用されている. 伸張歪によって  $E_g$ が低エネルギー側シフトすると吸収係数が増大する. Ge がギャップ L 点の間接遷移バンド端の直上 (0.8 eV @300 K) に直接ギャップ  $E_g^{dir}(\Gamma_1)$ もつことも有利に働く.

以下は主だった光学定数<sup>1,2)</sup>.

屈折率	n = 3.42 + 0.37 x +	$0.22x^2$ @ 300 K
誘電率	$\varepsilon = 11.7 + 4.5 x$	@ 300 K
二光子吸収係数	1.5 [1/GWcm]	@1.06µm, 100 K

### ■参考文献

- 1) URL: www.ioffe.ru/SVA/NSM//Semicond/SiGe/ {/Ge/, /Si/} (物性データの図表・文献を公開)
- 2) The Landolt-Börnstein Database Group III Condensed Matter, Numerical Data and Functional Relationships in Science and Technology III/34C3, Optical properties. Part 3; III/41a1a, b "Semiconductors- Group IV Elements, IV-IV and III-V Compounds" Part a, b;

URL: www.springermaterials.com/navigation/bookshelf.html (本編未掲載の物性データが参照可)

3) C. G. Van de Walle and R. M. Martin, Phys. Rev., vol.B34, p.5621, 1986.

## 2-3 C(ダイヤモンド)

(執筆者:小出康夫) [2010年6月受領]

#### 2-3-1 ドーパントの基礎

ダイヤモンド半導体は、室温でバンドギャップ 5.5 eV をもち、Si と同様の多谷構造から成 る間接遷移型のエネルギーバンド構造をもつ.また、ダイヤモンドはイオン結合性をもたな い共有結合性のワイドギャップ半導体であるため、誘電率がほかの半導体に比べ小さく、比 誘電率は Si や GaAs に比べて半分以下の 5.7 である.有効質量モデルは小さな誘電率が n型 及び p型ドーパントのイオン化エネルギー(不純物準位)を大きくすることを予測する.実 験的にもダイヤモンド内のドーパントは大きなイオン化エネルギーのために、室温において 半導体デバイスとして駆動させるための充分な電子及び正孔濃度を確保することが容易では ない.ほかの半導体と比べると欠点も見られるが、既存の半導体の中では最もロバストな材 料であり、高温・極限環境、高パワーデバイスとしての応用が期待されている.本節では、 ダイヤモンド半導体のドーパントであるボロン(B)アクセプタ及びリン(P)ドナーやその pn 接合の特徴を理論的に概観する.

半導体内のドーパントのイオン化は、 $D^+ + e^- \rightarrow D^0 + E_D$ のように記述することができる. ここで、 $D^+$ はイオン化ドナー、 $e^-$ は電子、 $D^0$ は中性ドナー、及び $E_D$ はイオン化エネルギーを示している. 補償不純物を考慮して質量作用の法則を上式に適用すると、電子濃度 n、ドナー濃度  $N_D$ 、補償アクセプタ濃度  $N_A$ の間に以下の関係が成り立つ.

$$\frac{n(n+N_A)}{N_D - N_A - n} = \frac{N_C}{2} \operatorname{ex}\left[\operatorname{p} E_D / k_B T\right]$$
(3.1)

$$N_{C} = 2M_{C} \left( 2\pi m_{de}^{*} k_{B} T / h^{2} \right)^{3/2}$$
 (3.2)

ここで、kg及びTは、ボルツマン定数及び絶 対温度, Nc は有効状態密度である. ここで, h はプランク定数であり、 $m_{de}^*$ は状態密度有効質 量, Mcは等価な谷構造数を示しており, ダイヤ モンドの場合,  $m_{de}^* = (m_l^* m_t^* m_t^*)^{1/3}$ ,  $M_C = 6$  であ り、有効質量は、 $m_1^* = 1.4 m_0$ 、 $m_1^* = 0.36 m_0$ であ ろ. ダイヤモンド内の B 及び P のイオン化エネ ルギーは、ホール効果より測定されたキャリア 濃度の温度特性から式(3・1)及び式(3・2)を用い てそれぞれ 0.37 及び 0.6 eV と求められている. 図 2·5 に、計算された種々補償比 c = N<sub>4</sub>/N<sub>0</sub>にお けるダイヤモンド内伝導電子の温度特性を示す. ここで、 $E_D = 0.6 \text{ eV}, N_D = 5 \times 10^{18} \text{ cm}^{-3}$ としてい る. 電子濃度は温度の増加に対して式(3·1)のイ オン化エネルギーを反映して指数関数的に増加 している. c>1×10<sup>-4</sup>では、電子濃度は補償比に



**図 2・5** P ドープダイヤモンドにおける種々 補償比 (*c*) に対する電子濃度の温度特性の計 算値

非常に敏感に依存し,強補償域と呼べる.室温における電子濃度はc = 0.1から  $1 \times 10^{-5}$ の増加 に対して  $10^{10}$ から  $10^{14}$  cm<sup>-3</sup>まで変化する.また $c < 1 \times 10^{-4}$ は,ほぼc = 0の補償がない弱補 償域に対応している.ダイヤモンド内の Pドナー及び Bアクセプタは,イオン化エネルギー が大きいため、キャリア濃度は温度に敏感であり、更に補償効果の影響を強く受け易いこと が特徴である.室温において高キャリア濃度を得るためには補償不純物(あるいは欠陥)を 極力減らすことが重要になる.

### 2-3-2 pn 接合

次に、これらの特徴をもつ n 形及び p 形ダイヤモンドを用いた pn 接合の特徴を理論的に解 析する. n 側のドナー密度  $N_{Dn}$  及び p 側のアクセプタ密度  $N_{Ap}$  が, それぞれ 1×10<sup>18</sup> cm<sup>-3</sup> 及び 12・6×10<sup>18</sup> cm<sup>-3</sup>, c = 1%である 1次元の pn 接合を考える.ポアソン方程式をキャリア電荷も 考慮して数値的に解くことによってポテンシャル分布及び電子濃度分布を求めた. 図 2・6(a) に n 側及び p 側の空間電荷密度プロファイル,図 2・6(b) にそれら空間電荷密度分布の 1 次微 分プロファイルを示す.図から空間電荷層内では、ドナー及びアクセプタはほぼイオン化し ていることが分かる.一方、空間電荷層端は急峻な電荷分布を示さず、わずかなダレが見ら れ、空間電荷層幅  $x_{Sn}$  及び  $x_{Sp}$ を図 2・6(b) に示す 1次微分のピーク位置として定義する.図 2・ 6(c) に、室温における n 側及び p 側のキャリア濃度プロファイルを示す.X = ± 200 nm での 電子及び正孔濃度は、それぞれ  $n_0 = 2.5 \times 10^{11}$  cm<sup>-3</sup> 及び  $p_0 = 5 \times 10^{14}$  cm<sup>-3</sup> であり、これら少な

いキャリア濃度は前節で述べた大き な活性化エネルギーと 1%の補償比に 起因している.ここで注目すべき点は, キャリア濃度分布が空乏層端近傍にお いてなだらかなことである.この遷移 領域の長さはほぼデバイ長程度であり, 原因は小さな $n_0$ 及び $p_0$ の値,及び大き な補償ドナー及び補償アクセプタ濃度

(10<sup>16</sup> cm<sup>-3</sup>) にある.ここで空乏層端 を図2·6(c) に示すように no/2 及び po/2 の位置で定義すると,図から空乏層幅 は空間電荷層幅に較べて A<sub>n</sub> 及び A<sub>p</sub>だけ 長いことが分かる.これは,各ドーパ ントの大きな活性化エネルギーによっ て,室温でのキャリア濃度が低いこと 及び補償電荷濃度が比較的高いために 起こるデバイテールに起因しており, ここでは"ディープドーパント効果" と呼ぶことにし,このディープドーパ ント効果がダイヤモンドの大きな特徴 となっている.



**図 2・6** (a) 空間電荷密度, (b) 空間電荷密度の1次微分 値,及び (c) キャリア濃度プロファイル

## 2-4 GaAs

(執筆者:下村 哲) [2010年6月受領]

GaAsは、13 族元素のガリウムと15 族元素のヒ素が1:1の比で化合した化合物半導体である.GaAsは、電子の質量が軽く、飽和電子移動度が高い.このため、電界効果トランジスタ(FET:Field Effect Transistor)などの高電子移動度トランジスタ(HEMT:High Electron Mobility Transistor)、ショットキーダイオード、ヘテロバイポーラトランジスタ(HBT:Heterobipolar Transistor)、それらを集積して作製するモノリシックマイクロ波集積回路

(MMIC: Monolithic Microwave Integrated Circuits)などの高速電子デバイスの活性層にInGaAs とともに用いられている. 直接遷移型半導体で、半導体レーザー、発光ダイオードなどの光 デバイスの活性層として有用である. これらのデバイスは GaAs 基板結晶上に作製される. GaAs 基板の大口径化,転位密度の低減化技術の開発がデバイスの性能と生産性の向上に大 きく寄与している.

#### 2-4-1 GaAs の結晶構造,格子定数,線膨張係数,融点,密度<sup>1)</sup>

常温・常圧下の GaAs の結晶構造は、閃亜鉛鉱型構造(Zinc Blende Structure)である.格 子定数は、300 K で a = 5.65325 Åである. 187 k bar 以上の高圧下では、斜方晶(a = 4.946, b = 4.628, c = 5.493 Å.at 209 k bar, 28 °C)に歪んだ NaCl 型構造となる.

以下に主な物性値を載せる. 絶対温度Tの関数となっているものはその温度依存性である.

線膨張係数	$\alpha = (-1.12 + 4.1 \times 10^{-2}T - 5.9 \times 10^{-5}T^2)  (\times 10^{-6} \text{/K})  120 \text{ K} < T < 350 \text{ K}$
	$\alpha = (4.24 + 5.82 \times 10^{-3}T - 2.82 \times 10^{-6}T^2) (\times 10^{-6}/\text{K}) 200 \text{ K} < T < 1000 \text{ K}$
密度	$\rho = 5.3176 \text{ [g/cm^3]}$ at 298.15 K
融点	$T_m = 1513$ [K]
熱抵抗率	$\kappa^{-1} = 2.27  [\mathrm{K} \mathrm{cm} / \mathrm{W}]$
デバイ温度	$\Theta_{\rm D} = 360  [\rm K] > 140 \ \rm K$
	$\Theta_{\rm D} = 340$ [K] at 0 K
弾性定数	$c_{11} = 11.9  [10^{11} \text{ dyne / cm}^2]$
	$c_{12} = 5.38  [10^{11} \text{ dyne / cm}^2]$
	$c_{44} = 5.95  [10^{11} \text{ dyne / cm}^2]$
光学フォノン,	音響フォノンの波数〔cm-1〕
	$v_{\rm LO}(\Gamma) = 285.0$ , $v_{\rm LO}(X) = 240.7$ , $v_{\rm LO}(L) = 238.3$ ,
	$v_{\rm TO}(\Gamma) = 267.3$ , $v_{\rm TO}(X) = 252.0$ , $v_{\rm TO}(L) = 261.3$ ,
	$v_{\rm LA}({\rm X}) = 226.7$ , $v_{\rm LA}({\rm L}) = 208.7$ ,
	$v_{\rm TA}({\rm X}) = 78.7$ , $v_{\rm TA}({\rm L}) = 62.0$
音速〔m/s〕at 3	300 K
[100]	方向 縦波 4.731×10 <sup>3</sup> , 横波 3.345×10 <sup>3</sup>
[110]ブ	方向 縦波 5.235×10 <sup>3</sup> ,横波 [001] 方向変位 3.345×10 <sup>3</sup>
	横波 [1 1 0] 方向変位 2.476 ×10 <sup>3</sup>
[111] 7	元向 縦波 5.397 ×10 <sup>3</sup> ,横波 2.796 ×10 <sup>3</sup>

## 2-4-2 GaAs のバンド構造とバンド端質量<sup>1)</sup>

GaAs のバンド構造を図 2・7 に示す. エネル ギーの原点は価電子帯の頂上にある. 価電子帯の 頂上, 伝導帯の底は, Γ点 $\vec{k} = (0,0,0)$ にあり, 直 接遷移型である. 伝導帯の 2 番目の極小値は, L 点 [ $\vec{k} = (\pi/a, \pi/a, \pi/a)$ ], 3 番目の極小値は, X 点 [ $\vec{k} = (2\pi/a, 0, 0)$ ] にある.

 $E_g$ 及び伝導帯最低エネルギーバンドの $\Gamma$ 点と L点,X点とのエネルギー差の $E_{TL}(T)$ , $E_{TX}(T)$ の温度依存性など,バンド構造に関する物性値を 以下に与える.

$$\begin{split} E_g (300\text{K}) = 1.424 [\text{eV}], & E_g (77\text{K}) = 1.508 [\text{eV}], \\ E_g (4.2\text{K}) = 1.519 [\text{eV}] \\ E_g (T) = 1.519 - 5.408 \times 10^{-4}T^2 / (T + 204) [\text{eV}] \\ E_{TL}(T) = 0.296 - 6.45 \times 10^{-5}T^2 / (T + 204) [\text{eV}] \\ E_{TX}(T) = 0.462 - 8.05 \times 10^{-5}T^2 / (T + 204) [\text{eV}] \\ \hline \ensuremath{\mathbb{R}} + \mathcal{O}$$
 質量  $0.067m_0$ 重い正孔の質量  $0.51m_0$  (状態密度質量) 軽い正孔の質量  $0.082m_0$  (状態密度質量) デフォメーションポテンシャル  $a(\Gamma_{1c}) - a(\Gamma_{15\nu}) = -13.5$ ,

### 2-4-3 GaAs の屈折率,反射率,吸収係数<sup>2)</sup>

b = -2.0, d = -5.4 [eV]

GaAs の複素屈折率の実部 n と虚部 k, 反射率 R, 吸収係 数 $\alpha$ のスペクトルを図 **2**•8 に示す. 複素屈折率の虚部及び 吸収係数のスペクトルの 3.0 eV 付近にあるピークは, 図 2• 7 の「点から L 点 ( $\Lambda$ -line) で, 伝導帯と価電子帯の分散が ほぼ 3.0 eV と等間隔を保って変化するためである. 5.0 eV 付近のピークについても同様で, 「点から X 点 ( $\Lambda$ -line), 「 点から K 点 ( $\Sigma$ -line) 上の伝導帯と価電子帯の分散が 5.0 eV の間隔を保っている.



**図 2・7** GaAs のバンド構造



図 2・8 GaAs の複素屈折率実 部 n (実線), 虚部 k (破線), 反射率 R, 吸収係数 $\alpha$  (×10<sup>5</sup> cm<sup>-1</sup>)

- 1) O. Madelung, W. von der Osten, U. Rössler, "Landolt-Börnstein, Numerical data and functional relationships in science and technology, new series group 3 volume 22 a, Intrinsic properties of group IV elements and III-V, II-VI and I-VII compounds semiconductors crystal and solid state physics," Springer, p. 136-139 and p. 346-349, 1989. (本参考文献では、本節に載せられなかった多くの物性値を見ることができる)
- 2) 応用物理学会(編), "応用物理データブック,"丸善, p. 327, 406. 1994.

## 2-5 AlGaAs

(執筆者:下村 哲) [2010年6月受領]

AlGaAs は、13 族と 15 族の化合物半導体 GaAs と AlAs を混ぜて結晶とした混晶半導体で ある. Al 組成が高いほどエネルギーギャップは広く、屈折率は低くなる. GaAs 基板に格子 整合し、あらゆる Al 組成の AlGaAs が GaAs 基板上に成長可能である. AlGaAs は GaAs や InGaAs などバンドギャップの狭い化合物半導体ともに用いられ、障壁として電子や正孔をバ ンドギャップの狭い化合物半導体に閉じ込める. 1968 年に初めて室温発振した半導体レー ザーでは、n型の AlGaAs 層とp型の AlGaAs 層で GaAs 発光層を挟んだ構造(ダブルヘテロ 構造)が用いられた. GaAs 基板上に作製される半導体レーザー、高電子移動度トランジス タ、ヘテロバイポーラトランジスタなど多くのヘテロ構造デバイスに AlGaAs が使われてい る. 一般の混晶と同様に、AlGaAs の基礎的な物性値は、GaAs と AlAs の物性値の線形補完 で表されるものと、組成の二次関数で表されるものがある. AlGaAs の取り扱いの注意点と しては、Al 組成が高くなるほど、大気中で酸化されやすいことである. 酸化を防ぐために、 数 nm の厚さの GaAs 層を成長して AlGaAs 層が直接大気に触れないようにする必要がある.

### 2-5-1 AlGaAs の結晶構造と主な物性値

AlGaAs は、Ga 原子と Al 原子の区別をしなければ、GaAs、AlAs と同じ閃亜鉛鉱型構造で ある。AlGaAs には非混和ギャップ(Misibility Gap)はない. すなわち、x = 0から 1 までの あらゆる組成の Al<sub>x</sub>Gal<sub>1-x</sub>As 混晶が作製できる。低温における AlGaAs のバンド間発光の半値 幅が 5 meV 程度であることから Ga 原子と Al 原子がほぼランダムに 13 族サイトを占め、半 値幅は混晶組成の統計的揺らぎによることが明らかになっている。

以下に主な物性値の Al 組成 x に対する依存性を示す<sup>1)</sup>.

格子定数	a = 5.6533 + 0.0078 x [Å] at 300 K
熱膨張係数	$\alpha = 6.4 - 1.2x$ [×10 <sup>-6</sup> /K]
密度	$\rho = 5.36 - 1.6x \text{ [g/cm}^3\text{]}$
融点(液相線)	$T_m = 1511 - 58x + 560x^2$ [K]
(固相線)	$T_m = 1511 + 1082x - 580x^2$ [K]
熱容量	c = 0.08 + 0.03x [cal/g K]
熱抵抗率	$\kappa^{-1} = 2.27 + 20.83x - 30x^2  [K \text{ cm} / W]$
デバイ温度	$\Theta_{\rm D} = 370 + 54x + 22x^2$ [K] at 300 K
弾性定数	$c_{11} = 11.88 + 0.14 x$ [10 <sup>11</sup> dyne / cm <sup>2</sup> ]
	$c_{12} = 5.38 + 0.32x$ [10 <sup>11</sup> dyne / cm <sup>2</sup> ]
	$c_{44} = 5.94 - 0.05  [10^{11} \text{ dyne / cm}^2]$

光学フォノンでは、GaAs-type と AlAs-type のフォノンが観測される.  $\Gamma$ 点における光学 フォノンの波数の Al 組成依存性は、以下のとおりである.

GaAs - type	$v_{\rm LO} = 292.2 - 52.8x + 14.4x^2 ,$	$v_{\rm TO} = 268.3 - 5.2x - 9.3x^2$	$[cm^{-1}]$
AlAs - type	$v_{\rm LO} = 359.7 + 70.8x - 26.8x^2 ,$	$v_{\rm TO} = 359.7 + 4.4x - 2.4x^2$	$[cm^{-1}]$

### 2-5-2 AlGaAs の電子構造

図 2・9 に室温の AlGaAs のГ点, X 点, L 点のエネ ルギーギャップの Al 組成依存性を示す. このエネル ギーギャップは伝導帯最低エネルギーバンドのГ点, X 点, L 点のエネルギーと価電子帯上端(Г点)との 差で定義されている. これらのエネルギーギャップ の Al 組成依存性は、以下の式で表される.

 $E_g(\Gamma) = 1.420 + 1.087x + 0.438x^2$  $E_g(X) = 1.905 + 0.10x + 0.16x^2$ 

 $E_g(L) = 1.705 + 0.695x + 0.438x^2$ 

AlGaAs は *x* = 0.43 以下で直接遷移型半導体, *x* = 0.43 以上で間接遷移型半導体である.電子の有 効質量をΓ-, X-, L-バンドについて記す.

電子の状態密度質量

 $m_e(\Gamma) = (0.067 + 0.083 x)m_0$ ,

 $m_{\rm e}({\rm X}) = (0.85 - 0.14 x)m_0$ ,

 $m_e(L) = (0.56 + 0.1x)m_0$ ,

重い正孔及び軽い正孔の状態密度有効質量 $m_{hh}$ ,  $m_{lh}$ は,

 $m_{hh} = (0.62 + 0.14x)m_0$ ,

### 2-5-3 AlGaAs の屈折率

AlGaAs の屈折率は, Al 組成が高いほど小 さくなり,光子エネルギーが高いほど大きく なる.その変化を図2・10に示す.屈折率のス ペクトルに見られるピークは,励起子による ものである.



図 2·9 AlGaAs のΓ点, X 点, L 点のエ ネルギーギャップ<sup>2)</sup>

電子の伝導度質量  $m_e(\Gamma) = (0.067 + 0.083x)m_0$   $m_e(X) = (0.32 - 0.06x)m_0$   $m_e(L) = (0.62 + 0.14x)m_0$  $\dots m_r$  は.

 $m_{lh} = (0.087 + 0.063 x)m_0$ 



図 2·10 AlGaAs の屈折率の Al 組成依存性<sup>2)</sup>

#### ■参考文献

 O. Madelung, W. von der Osten, U. Rössler, "Landolt-Börnstein, Numerical data and functional relationships in science and technology, new series group 3 volume 22 a, Intrinsic properties of group IV elements and III-V, II-VI and I-VII compounds semiconductors crystal and solid state physics" p. 136-139 and p. 346-349. Springer, 1989. (本参考文献では、本節に載せられなかった多くの物性値を見ることができる)

2) H. C. Casey, Jr., M. B. Panish, "Heterostructure lasers," Part B p.17 and Part A p.44.

## 2-6 InAs, InGaAs

(執筆者:山下兼一) [2010年6月受領]

InAs は閃亜鉛鉱型の結晶構造を有する III-V 族化合物半導体の一つであり, GaAs との混晶 である InGaAs の電子的・光学的特性は、その混晶比に応じて連続的に変化する. 室温での バンドギャップエネルギー ( $E_g$ ) は 0.354~1.424 eV であり、すべての混晶比において直接遷 移型の半導体である. 近赤外~中赤外領域の光デバイスとして、あるいは優れたキャリア輸 送特性を活かした電子デバイス用材料として応用されている.

### 2-6-1 InAs

バルクの InAs は金属光沢をもった密度 5.667 g/cm<sup>3</sup>の立方晶系結晶であり、Czochralski 法 などにより成長される.一般的な酸には不溶、王水には可溶である.バルクでの主な物性定 数を表 2・1 に示す. Sb 系を除いた III-V 族化合物半導体の中では最も大きな格子定数を有し ており、典型的なナローギャップ半導体として位置づけられる.室温での E<sub>g</sub> (0.354 eV) は波 長 3.48 µm の光子エネルギーに相当し、p-i-n 型接合による光起電力型の中赤外線検出素子と して応用されている. 熱雑音を抑えるためにペルチェ素子などで冷却して使用されることが 多い.また、伝導帯有効質量が小さく、室温で大きな電子移動度を示すことも特長であり、 ホール素子や磁気抵抗素子として応用されている.なお、誘電関数や光学定数については、 分光エリプソメトリーの手法により測定された詳細なデータベースがある<sup>3</sup>.

InAs 単結晶薄膜の堆積技術としては有機金属気相成長法(Metalorganic Vapor Phase Epitaxy: MOVPE) や分子線エピタキシー法(Molecular Beam Epitaxy: MBE) などがある. GaSb とは格子定数が比較的近く, InAs あるいは GaSb 基板を用いたヘテロエピタキシャル成 長も可能である.その場合は Sb 系半導体との混晶あるいは超格子として用いられることが

物性名		InAs	In <sub>0.53</sub> Ga <sub>0.47</sub> As	
格子定数〔Å〕		6.058	5.869	
マリン伝動料(二)	ΤΟ(Γ)	217.3	(**)	
ノオノン振動級〔cm〕	LO(Γ)	238.6	(**)	
バンドギャップ	4.2 K	0.418	0.822 (2 K)	
エネルギー [eV]	300 K	0.354	0.728	
	<u></u>		0.041 (0 K)	
有効質量 (m <sub>0</sub> )	$m_{hh}$	0.57	0.46 (4.2 K)	
	m <sub>lh</sub>	0.025	0.064	
⊾. ப <del>ும்</del> விட்ட <sup>்</sup> ாட்ட	電子	20,000 ~ 33,000	11,200 ~ 13,800	
イヤリノ 1夕助度 【Cm / V·S】*	ホール	100 ~ 450	_	

表 2 • 1 InAs と In<sub>0.53</sub>Ga<sub>0.47</sub>As の主な物性定数<sup>1)</sup>

(\*) おおよそ 10<sup>15</sup>~10<sup>16</sup> cm<sup>-3</sup>のキャリア濃度における値を示している.

(\*\*) In<sub>0.53</sub>Ga<sub>0.47</sub>As のフォノンモードは複数の混晶モードから成る. 詳しくは文献 2) などを参照されたい. 多く, 波長 4 µm 程度までの中赤外領域で動作する発光・受光素子が作製される.

GaAs や InP 基板上へのエピタキシャル成長による格子不整合を積極的に利用した研究例 も多い. 圧縮歪をともなう Stranski-Krastanov 成長モードを利用して作製される自己形成型の In(Ga)As 量子ドットはその代表例であり<sup>4</sup>,光通信波長帯でのレーザーや光増幅器,更には 量子情報通信用単一光子光源へと研究展開されている.また,InP 基板上への InAs/InGaAsP 高歪量子井戸構造も作製されており,波長 2 µm 以上でのレーザー発振も報告がある<sup>5</sup>.

### 2-6-2 InGaAs

In<sub>x</sub>Ga<sub>1-x</sub>As は多様な実用化デバイスで取り入れられている代表的な混晶半導体である. 組 成不均一領域(Immiscibility Gap)は存在しない. 格子定数は Vegard の法則に従って 5.653 ~ 6.058 Å の範囲で変化し, InAs の組成比 x = 0.53 で InP 基板と格子整合させることが可能であ

る. この  $In_{0.53}Ga_{0.47}As$ は、同じく InP 基板に格子整 合する InGaAsP 四元混晶の中で最も小さな  $E_g$  をも つ混晶でもある (2-10 項参照).  $In_{0.53}Ga_{0.47}As$ の主な 物性定数は**表 2-1** に示している.

図 2・11 に、バルク In<sub>x</sub>Ga<sub>1-x</sub>As の室温における  $E_g$ の混晶比依存性を示す. これを  $E_g(x) = a + bx + cx^2$ と近似したときの二次係数である Bowing Parameter cは、文献によってばらつきはあるが、おおよそ 0.5 ~ 0.6 eV とされている. InP 基板との格子整合条件下 (x = 0.53) では  $E_g = 0.728$  eV となり、波長 ~1.7  $\mu$ m の光子エネルギーに相当する. このため、近赤外領域の光デバイス用材料,特に p-i-n フォトダイオード あるいはアバランシェフォトダイオードといった光 ファイバ 通信 用 受 光 素 子の 光 吸 収 層 として In<sub>0.53</sub>Ga<sub>0.47</sub>As が用いられる. この受光素子の感度波 長範囲は、吸収係数と光侵入長の波長分散の兼ね合 いなどにより決定され、一般的には 0.8 ~ 1.7  $\mu$ m 程 度となる.

図 2・12 に、In<sub>x</sub>Ga<sub>1-x</sub>As の伝導帯有効質量と電子移 動度の混晶比依存性を示す.伝導帯有効質量は、*E<sub>g</sub>* の場合と同様に、InAs 組成の増大に従って単調減少 する.一方,電子移動度にはそれにともなうような 単調増加の傾向が見られず,一旦極小値を取った後

(どの程度の混晶比で極小値を取るかはキャリア濃 度などに依存する), 急激な増加を示す.この混晶領 域での移動度の低下は合金散乱によるものである. しかしながら, x = 0.53程度になれば 10000 cm<sup>2</sup>/Vs 以上という GaAs を凌ぐ高い電子移動度が実現され



**図 2·11** In<sub>x</sub>Ga<sub>1-x</sub>As のバンドギャップエネル ギー<sup>6</sup>



**図 2・12** In<sub>x</sub>Ga<sub>1-x</sub>As の伝導帯有効質量と 電子移動度<sup>6)</sup>

る. このため, GaAs/AlGaAs 系デバイスに替わるものとして, In<sub>0.53</sub>Ga<sub>0.47</sub>As エピタキシャル 薄膜をベース層あるいはチャネル層とした InP 基板系のヘテロバイポーラトランジスタや高 電子移動度トランジスタなどが開発されている<sup>7)</sup>. これらは遮断周波数 ~300 GHz を優に超 える超高速の電子デバイスであり, 高 In 組成の歪 InGaAs 層の導入などにより更なるデバイ ス高速化の研究が進められている.

InGaAsの薄膜堆積には、InAsの場合と同様にMOVPE法やMBE法を用いることができる. デバイス生産の際には量産性に優れた MOVPE法が用いられる場合が多い.また、この混晶 ではバルク結晶成長の技術開発も進んでおり、In組成が 0.3 程度でも高品質な単結晶基板が 作製されている<sup>8)</sup>.これにより、InGaAsPやInGaAlAs、あるいはGaInNAsといった単結晶薄 膜を、幅広い混晶比で基板と格子整合させてエピタキシャル成長することが可能となり、デ バイス設計の際の自由度を高くすることができる.

- 1) 主として, O. Madelung, "Semiconductors: Data Handbook," 3rd ed., Springer, Berlin, 2003.
- 例えば, S. Emura, S. Gonda, Y. Matsui, and H. Hayashi, Phys. Rev. B, vol.38, p.3280, 1988. J. P. Estrera, P. D. Stevens, R. Glosser, W. M. Duncan, Y. C. Kao, H. Y. Liu, and E. A. Beam; Appl. Phys. Lett., vol.61, p.1927, 1992.
- 3) D. E. Aspnes and A. A. Studna, Phys. Rev. B, vol.27, p.985, 1983.
- 4) L. Goldstein, F. Glas, J. M. Marzin, M. N. Charasse, and G. Le Roux: Appl. Phys. Lett., vol.47, p.1099, 1985.
- 5) 佐藤具就, 満原 学, 近藤康洋, 応用物理, vol.77, p.1324, 2008.
- O. Madelung, "Physics of Group IV Elements and III-V Compounds," Landolt Börnstein, New Series, Group III, vol.17a, Springer, Berlin, 1982.
- 7) 例えば, 末光哲也, 応用物理, vol.69, p.141, 2000. 宮本恭幸, 古屋一仁, 応用物理, vol.71, p.285, 2002.
- 8) K. Nakajima, T. Kusunoki, and K. Otsubo, J. Cryst. Growth, vol.173, p.42, 1997.

## 2-7 GaP

(執筆者:赤羽浩一) [2010年6月受領]

GaP(ガリウムリン)は、GaAs, InPとならび広く用いられている III-V 族化合物半導体であり、主に LED などの光デバイス用に利用されている.本節では GaP の基本的性質及び応用について述べる.

### 2-7-1 構造的性質

GaP の結晶構造は立方晶系関亜鉛鉱構造 (Zinc Blende) で,密度は 4.14 g/cm<sup>3</sup>である.ただし,高圧下 (21~30 GPa) ではβスズ構造に相転移する.融点は 1457 ℃であるが,真空中の加熱においては P の蒸気圧が高いため, P が先に脱離する.格子定数は 5.4505 Åであり, Si の格子定数 (5.431 Å) に近い値をもつため, Si 基板上における GaP 結晶成長が研究レベルでは多数行われている.GaP ウェーハは最大 3 インチまでのサイズが市販されている.またその供給は日本の 3 社 (住友金属鉱山,昭和電工,信越半導体) で世界シェアをほぼ独占している.GaP 基板の需要は LED 用途などで比較的高く,化合物半導体基板全体の 2 割程度を占めるが,近年は減少傾向にある.

#### 2-7-2 パンド構造と基本的特性

GaP は間接遷移型のバンド構造をもち,バンドギャップ(X点の底とΓ点の頂上)は 300 K で 2.26 eV である.バンドギャップの温度依存性は下記の式で表される.

 $E_g = 2.34 - 6.2 \times 10^{-4} \times \frac{T^2}{T + 4.600}$ 

Tは絶対温度 [K] で、0K<T<1200Kの範囲である.なお、「点の底と「点の頂上のエネルギー差は 300Kにおいて 2.78 eV になる.電子の有効質量は縦有効質量 ( $m_i$ )が 1.12 $m_0$  ( $m_0$ は真空中の電子の質量),横有効質量 ( $m_i$ )が 0.22 $m_0$ へビーホール、ライトホールの有効質量はそれぞれ 0.79 $m_0$ , 0.14 $m_0$ である.

### 2-7-3 電気的特性

InP 中においてドナー,アクセプタとなる代表的な原子とその活性化エネルギーは表 2・2 のとおりである.

ドナー原子	活性化エネルギー	アクセプタ原子	活性化エネルギー
Li	0.061 eV	С	0.0543 eV
Sn	0.072 eV	Be	0.0566 eV
Si	0.085 eV	Mg	0.0599 eV
Te	0.093 eV	Zn	0.0697 eV

表 2・2 InP 中における代表的なドナー, アクセプタ原子

低キャリア濃度における電子,及びホールの移動度は 300 K においてそれぞれ 250, 150

cm<sup>2</sup>/Vs であり, GaAs, InP などに比べると小さな値を示す. これらの値はキャリア濃度に強 く依存する.

### 2-7-4 光学的特性

GaP の吸収のない波長領域(バンドギャップより十分エネルギーの小さい波長)における 屈折率は 300 K において n = 3.02 である.また,屈折率の温度依存性は下記の式で表される (80<300 K).

 $n = 2.932 \times (1 + 1 \times 10^{-4}T)$ 

バンドギャップエネルギー以上の吸収のある波長領域では屈折率の値は大きくなり,表2・ 3のように変化する.

波長〔nm〕	413	496	620	827	1000	2000
屈折率	4.081	3.605	3.334	3.178	3.17	3.02

表2 3 各波長における GaP の屈折率

### 2-7-5 その他(応用など)

GaP は光デバイス用の基板として幅広く用いられている. 波長 500~700 nm の可視光 LED として,各種の表示素子(赤,緑)や携帯電話の着信ランプ,テンキーボタン照明用,液晶 バックライトに使用されている.冒頭に述べたとおり,GaP 基板の需要は化合物半導体全体の2割程度であるが,近年ウェーハ枚数,ウェーハ出荷額ともに減少傾向が見られる. これ はウェーハの低価格化が進んだことや,可視光波長域をカバーする AlGaInP 系材料が GaAs 基板上で形成できる技術が進んだこと,窒化物系の LED の台頭などにより,LED に利用す るための GaP 基板の需要が減少したためであると考えられる.

GaP は Si に近い格子定数をもつことから Si 基板上への GaP エピタキシャル成長の研究が 長年行われている. Si 基板上への成長では大口径の Si 基板が利用できるなど有利な点があり, 産業応用上重要である.更に,近年ではタンデム型太陽電池への応用なども盛んに行われて いる.しかしながら,単原子半導体である Si 上に化合物半導体結晶を成長する際のアンチ フェーズドメインの形成や,熱膨張係数差に起因するクラックの発生など,解決すべき課題 が残っている.

- M. Levinshtein, S. Rumyantsev, and M. Shur, "Handbook series on Semiconductor Parameters Vol.1," World Scientific, Singapore, Chap.8, 1996.
- 2) Otfried Madelung, "Semiconductors: Data Handbook," Springer, Berlin, Chap.2, 2003.
- 3) Sadao Adachi, "Properties of Group-IV, III-V, II-VI semiconductors," Wiley, England, 2005.
- 4) http://www.meti.go.jp/policy/nonferrous\_metal/strategy/semiconductor04.pdf
- W. Martienssen and H. Warlimont, "Springer Handbook of Condensed Matter and Materials Data," Part 4.1.2.3, Springer, Berlin, 2005.

## 2-8 InP

(執筆者:赤羽浩一) [2010年6月受領]

InP (インジウムリン)は GaAs とならび電子材料,光材料として広く用いられている III-V 族化合物半導体である.本節では InP の基本的性質及び応用について述べる.

### 2-8-1 構造的性質

InP の結晶構造は立方晶系関亜鉛鉱構造 (Zinc Blende) で,密度は 4.81 g/cm<sup>3</sup>である.ただし、高圧下 (34 GPa 以上) においては塩化ナトリウム型構造に相転移する.融点は 1062  $^{\circ}$  であるが、真空中の加熱においては P の蒸気圧が高いため、P が先に脱離する.格子定数は 5.8687 Åであり、GaAs (5.6533 Å)、AlAs (5.661 Å) と InAs (6.0583 Å)の中間の値をもつため、InP 基板上では InGaAlAsP 系の様々な混晶を格子整合の条件を満たしつつ結晶成長が可能である. InP ウェーハは最大 4 インチまでのサイズが市販されている.また、その供給は日本の 3 社 (住友電工、日鉱マテリアルズ、昭和電工)で世界シェアの 70 %以上を占めている.

### 2-8-2 バンド構造と基本的特性

InP は直接遷移型のバンド構造をもち,バンドギャップは 300 K で 1.344 eV である.バンドギャップの温度依存性は下記の式で表される.

 $E_g = 1.421 - 4.9 \times 10^{-4} \times \frac{T^2}{T + 327}$ 

Tは絶対温度 [K] で、0K<T<800 Kの範囲である.電子の有効質量は 0.08  $m_0$  ( $m_0$  は真空中の電子の質量)、ヘビーホール、ライトホールの有効質量はそれぞれ 0.6  $m_0$ 、0.089  $m_0$  である.また、ホールのスピン軌道スプリッティングのエネルギーは 300 K で 0.11 eV であり、スプリットオフバンドにおけるホールの有効質量は 0.17  $m_0$  である.

### 2-8-3 電気的特性

InP 中において, ドナー, アクセプタとなる代表的な原子とその活性化エネルギーは表 2・ 4 のとおりである.

ドナー原子	活性化エネルギー	アクセプタ原子	活性化エネルギー
S		С	0.04 eV
Si	∼0.0057 eV	Zn	0.035 eV
Sn	0.0037 CV	Be	0.03 eV
Ge		Mg	0.03 eV

表2・4 InP中における代表的なドナー,アクセプタ原子

低キャリア濃度における電子,及びホールの移動度は,300 K においてそれぞれ 5400,200 cm<sup>2</sup>/Vs である.77 K における移動度は電子で 130000 cm<sup>2</sup>/Vs,ホールで 14800 cm<sup>2</sup>/Vs との報

告があり非常に大きな値を示すが、これらの値はキャリア濃度に強く依存する.

#### 2-8-4 光学的特性

InP の吸収のない波長領域(バンドギャップより十分エネルギーの小さい波長)における 屈折率は 300 K において n = 3.1 である.また,屈折率の温度依存性は下記の式で表される.

 $n = 3.075 \times (1 + 2.7 \times 10^{-5}T)$ 

バンドギャップエネルギー以上の吸収のある波長領域では屈折率の値は大きくなり,表2・ 5のように変化する.

波長〔nm〕	399	652	1000	2000
屈折率	4.100	3.410	3.327	3.134

表2 5 各波長における InP の屈折率

### 2-8-5 その他(応用など)

InP は光デバイス,電子デバイス用の基板として幅広く用いられている. InGaAsP 系の混 晶半導体は組成をコントロールすることにより, InP 基板上で格子整合ができ,かつバンド ギャップ,屈折率が連続的に変化できることから,通信波長帯(1.3 µm 及び 1.55 µm 帯)の 半導体レーザー材料として広く用いられている.この際,Alを含まない材料系であることか らデバイスの長寿命化が達成でき,長期間にわたって安定動作することが望まれる通信波長 帯デバイスの用途に適しているとされている.

また, InP 基板上に格子整合する InGaAs 系材料は高電子移動度トランジスタ (High Electron Mobility Transistor: HEMT) のチャンネル層としても用いられており,500 GHz を超える遮断 周波数ををもつ HEMT が実現されている.

- M. Levinshtein, S. Rumyantsev, and M. Shur: "Handbook series on Semiconductor Parameters Vol.1," World Scientific, Singapore, Chap.8, 1996.
- 2) Otfried Madelung, "Semiconductors: Data Handbook," Springer, Berlin, Chap.2, 2003.
- 3) Sadao Adachi, "Properties of Group-IV, III-V, II-VI semiconductors," Wiley, England, 2005.
- 4) http://www.meti.go.jp/policy/nonferrous\_metal/strategy/semiconductor04.pdf
- W. Martienssen and H. Warlimont, "Springer Handbook of Condensed Matter and Materials Data," Springer, Berlin, Part 4.1.2.4, 2005.

## 2-9 GalnP

(執筆者:喜多 隆) [2010年6月受領]

GaAs の格子整合する GaInP や Al を添加した AlGaInP は、赤色発光ダイオード(LED), レーザーダイオード(LD), ヘテロ接合バイポーラトランジスタ(HBT), 多接合太陽電池な ど高性能なデバイスに用いられている.本節では、GaInP, AlGaInP の特徴を述べる.

### 2-9-1 GainP

**Ga**<sub>x</sub>**In**<sub>1-x</sub>**P**の格子定数は Vegard 則に従って **GaP**と **InP**の格子定数の間を線形に変化し,室温の格子定数(単位は nm)は **GaP**のモル分率 x の関数として下記の式(33・1)で表されれる.

### a(x) = 0.5 8 6 8 0.0 4 1

(33.1)

GaAs の格子定数が 0.56532 nm なので,約x = 0.515 のとき GaAs に格子整合する. この GaAs 単結晶基板とのすぐれた整合性により, GaInP は様々な光デバイスや電子デバイスに利用され ている.

デバイス設計で重要になるのがバンド構造で ある.一般に合金半導体のバンド構造は、局所 的な格子歪み, チャージの交換などによって 組成に比例した Vegard 則に乗ることなく、非線 形に変化する.図2・13に極低温実験値と計算に よる結果を比較している.この図に示したこれ までに報告されている実験や計算結果によれ ば、Γ-X レベルの交差は約 x = 0.7 で生じ、こ れ以下のGaPモル分率をとる場合はΓ点が最下 点となる直接遷移型になる. GaAs と格子整合 する Ga<sub>0.515</sub>In<sub>0.485</sub>P では室温のバンドギャップが 約1.91 eV (10 K で約1.97 eV)の直接遷移型半 導体である. GaInP は GaAs と整合させてヘテ ロ構造を作製できるので、赤色の LED や LD に 用いられているほか、多接合太陽電池の最上層 に応用して 30%を超えるエネルギー変換効率 が得られている.

同じ格子整合系である AlGaAs/GaAs のバン ドオフセットが伝導バンドの方がバンドギ ャップの約 60 %と大きいのに対して,



**図 2・13** Ga<sub>x</sub>In<sub>1-x</sub>P バンド端の GaP モル分率 x 依存性<sup>1)</sup>



GaInP/GaAs では約30%と小さくなる.これがGaInPがHBTで利用される理由の一つである. また, GaInP は Al 元素を含まないため, AlGaAs に見られる DX センターのような深い不純 物準位がなく、また表面再結合電流も少ない.更に、GaInPの衝突イオン化係数は AlGaAs に比べて1桁程度小さく、これらの特徴により、AlGaAs を利用する場合に比べて、電界効果トランジスタ動作における動作の安定性向上、ドレイン電流-電圧特性の周波数分散の抑制,パワー特性の向上など、素子本来の性能を引き出し、安定に動作させることができる<sup>3)</sup>.

### 2-9-2 AlGainP



**図 2・15** (Al<sub>x</sub>Ga<sub>1-x</sub>)<sub>0.5</sub>In<sub>0.5</sub>P バンド端の AlInP モル分率 x 依存性

### 2-9-3 原子オーダリング4)

エピタキシャル成長した合金半導体は、局所的な構造歪みやチャージの交換によってエピ タキシャル結晶表面で最安定な原子位置が存在して規則構造が発生することがある.原子レ ベルの短距離秩序構造はバンドギャップの組成変化におけるボーイングを発生する原因にな り、一方、長距離の規則構造は結晶格子の繰り返しに影響してブリュアン端波数を減少させ る.長距離秩序構造によってブリュアンゾーンが縮小すればエネルギーバンド構造が端で折 り返して、波数空間におけるバンド構造は一変する.言い換えれば、オーダーパラメータを 制御することによって同じ合金組成のまま物性の制御が可能になる.このような合金半導体 に現れる自己組織化構造は自然にできる超格子という意味で自然超格子と呼ばれており、 1984 年に InGaAs と AlGaAs においてほぼ同時期に発見され、その後 SiGe, InGaAs, AlGaAs, GaInP, AlGaInP, GaAsSb など多くの合金半導体で相次いで発見されている.特に GaInP や AlGaInP では [-111] と [1-11] の二つの方向にIII族の副格子の位置に Ga, In が選択的に収ま ることによって, CuPt型の単原子層の自然超格子構造が現れる.物性上最も重要な点は、自 然超格子の発生によりバンドギャップが小さくなり、価電子バンド頂上の縮退が解けること などがあげられる.

- 1) M. Bugajski, A. M. Kontkiewicz, and H. Mariette, Phys. Rev. B, vol.28, p.7105, 1983.
- 2) T. Nishino, J. Cryst. Growth, vol.98, p.44, 1989.
- 3) 常信和清,田中 均,応用物理,vol.69, p.152, 2000.
- A. Zunger and S. Mahajan, in "Handbook of Semiconductors, 2nd edition," edited by S. Mahajan, Elsevier, Amsterda, vol.3, pp.1399-1514, 1994.

## 2-10 InGaAsP

(執筆者:白方 祥) [2010年6月受領]

### 2-10-1物性

In<sub>1-x</sub>Ga<sub>x</sub>As<sub>y</sub>P<sub>1-y</sub>は光ファイバ通信に適した波長(1.3~1.6  $\mu$ m)の発光及び受光素子のために 開発された4元混晶半導体である.4元系混晶はx,yの二つの混晶組成の自由度により,禁 制帯幅と格子定数などの二つの物性定数を独立に変化させることが可能である.格子定数は, a(x,y) = 0.58687 - 0.04176x + 0.01896y + 0.00125xy [nm]と表される<sup>1</sup>.**図2**·16 に In<sub>1-x</sub>Ga<sub>x</sub>As<sub>y</sub>P<sub>1-y</sub> の等禁制帯線,等格子定数線,及び格子定数と禁制帯幅の関係を示す.混晶を構成する化合 物において GaAs, InP,及び InAs は直接遷移型であるが,最もワイドギャップの GaP は間 接遷移型である.したがって, In<sub>1-x</sub>Ga<sub>x</sub>As<sub>y</sub>P<sub>1-y</sub>は,組成が GaP の近傍では間接遷移型を示すが, それ以外では直接遷移型を示す.

InP 基板への格子整合条件 x = 0.1896y / (0.4176 - 0.0125y) におけるバンドギャップは  $E_g = 1.35 - 0.72y + 0.12y^2$  [eV] と示され、禁制帯幅は 0.72 eV (In<sub>0.53</sub>Ga<sub>0.47</sub>As) から 1.35 eV (InP) まで変化する. 一方、GaAs を基板とした格子整合系の場合、禁制帯幅は 1.43 eV (GaAs) から 1.9 eV (In<sub>0.49</sub>Ga<sub>0.51</sub>P) である.

電子の有効質量は、InP 格子整合系混晶に対して、m<sup>\*</sup>=0.080-0.039yと組成yに対して図 2・17 に示すように直線的に変化することがサイクロトロン共鳴とマグネトフォノン測定よ り求められている<sup>2)</sup>.

フォノンに関しては InP に格子整合した混晶に対してラマン散乱測定により, 擬2モード



**図 2・16** In<sub>1-x</sub>Ga<sub>x</sub>As<sub>1-y</sub>P<sub>y</sub> 混晶半導体の等バンドギャップ線(実線)及び等格子定数線(波線)<sup>1)</sup>,及 び格子定数とバンドギャップの関係(右下) 特性を示し、InP 及び InGaAs ライクなモードが現れることが示されている.フォノン周波数 の組成 y に対する依存性を図 2·18 に示す<sup>3</sup>. また、GaAs に格子整合した混晶の場合、Ga ラ イクなモードと GaAs ライクなモードを示す<sup>4)</sup>. In<sub>0.49</sub>Ga<sub>0.51</sub>P は 2 モード特性との解釈がある が、フォノン周波数が混晶組成に対して直線的に変化することなどから 1 モードの可能性が ある<sup>4)</sup>.



## 2-10-2 デバイス応用

InP を基板とした格子整合系のナローギャップ半導体は、主に光ファイバ通信用の半導体 レーザーや受光器、光変調器などで使われている. GaAs を基板とした格子整合系のワイド ギャップの In<sub>Lx</sub>Ga<sub>x</sub>As<sub>y</sub>P<sub>Ly</sub>半導体は、可視系半導体レーザーへの応用がなされた経緯がある. こ の系で最も禁制帯幅が大きい In<sub>0.49</sub>Ga<sub>0.51</sub>Pをバリア層として用いた実用的な半導体レーザーでの 発振波長は 700 nm 程度であることから、In<sub>0.49</sub>Ga<sub>0.51</sub>P を活性層として、更にワイドギャップの Al を含む In<sub>0.49</sub>(Al<sub>y</sub>Ga<sub>1-y</sub>)<sub>0.51</sub>P をバリア層として 630 nm の赤色半導体レーザーが実用化された. また、In<sub>0.49</sub>Ga<sub>0.51</sub>P/GaAs/Ge 系の超効率タンデム型太陽電池用材料としても用いられている.

## 2-10-3 エピタキシャル成長

初期の研究では InP 基板上に液相エピタキシャル (LPE) 法により結晶成長及びヘテロ構 造作製が行われ,半導体レーザーや受光素子の研究が飛躍的に進展した.また,可視の発光 素子の目的から GaAs 基板上への LPE 成長も行われた.混晶特有の現象として InP 基板 GaAs 基板の格子整合系では,混晶組成の中央付近で非混和性の影響を受け,結晶性の低下や成長 速度の低下が生じる.現在では,有機金属気相成長法 (OMVPE) 法により全組成での高品質 な結晶成長が可能となり,光デバイスのほとんどが OMVPE 法により作製されている.また, OMVPE 法で成長した In<sub>0.49</sub>Ga<sub>0.51</sub>P において,基板温度に依存してバンドギャップが低下する. これは混晶が disorder 相から CuPt 規則構造をとることによる.

- 1) R. L. Moon, G.A.Antypas, and L. W. James, J. Electronic Materials, vol.3, p.635, 1974.
- 2) R. J. Nicholas, S. J. Sessions, and J. C. Paul, Appl. Phys. Lett. vol.37, p.178, 1980.
- 3) A. Pinczuk, J. M. Wordlock, R. E. Nahory, and M. A. Pollack, Appl. Phys. Lett., vol.35, p.461, 1980.
- 4) T. Inoshita and A. Usui, Jpn. J. Appl. Phys., vol.23, p.L135, 1984.

## 2-11 GaN

(執筆者:船戸 充) [2010年6月受領]

GaN は、ガリウム(Ga)と窒素(N)から成る化合物半導体であり、近年、紫外から可視 域での発光デバイスやパワーデバイス用の材料としてますます大きな注目を集めている.バ ルク結晶の作製は発展途上であるため、多くの場合、異種基板上へのヘテロエピタキシーに より製膜される.そのため、無歪の結晶を得ることが困難であり、未解明な物性定数も数多 く存在する.本節では、GaNの基礎物性に関して現時点で分かっていることをまとめる.

### 2-11-1 構造物性

GaN は図 2·19 に示すような六方晶系のウルツァイト構造をとる. 格子定数は,室温において c = 0.5185 nm, a = 0.3189 nm である. 理想的なウルツァイト構造において, c/a は,幾

何学的考察から 1.633 となるべきであるが, GaN の場合 は,構成元素である Ga と N のイオン性により,両者の 間に引力が働いて結晶が c 軸に沿って圧縮され,その結 果, c/a = 1.623 となっている.同じ原因により, c 軸長で 規格化されたボンド長 uは,理想的には 0.375 であるが, GaN では u = 0.377 となっている.

Ga-N 結合は、そのイオン結合性のため、N マイナスイ オンから Ga プラスイオンに向かう方向に分極している. 理想的なウルツァイト構造(*c*/*a* = 1.633, *u* = 0.375)であ れば、各々の結合に属する分極が結晶全体では打ち消し あい、巨視的には分極効果は表れない.しかし実際には、

上記の理想からのずれにより分極が完全には打ち消されず,-0.034 C/m<sup>2</sup> 程度の自発分極が 観察される.更に,結晶が歪んだ場合には,格子変形にともなってピエゾ分極が加わる.こ れら自発及びピエゾ分極は,発光デバイスにおいては,電子正孔の重なりを減じて輻射再結 合確率を低減する負の要因となり得る.一方,電子デバイスにおいては,ヘテロ界面に分極 誘起キャリアを発生させ,高移動度トランジスタとして機能させる要因となることが知られ ており,デバイス設計における重要なパラメータである.歪と応力を関連付ける弾性スティ フネス定数は比較的精度よく求められているが (C<sub>11</sub> = 390 GPa, C<sub>12</sub> = 145 GPa, C<sub>13</sub> = 106 GPa, C<sub>33</sub> = 398 GPa, C<sub>44</sub> = 105 GPa),歪あるいは応力とピエゾ分極を関連付ける圧電定数テンソル については,今後,更に信頼性を高める必要がある.

### 2-11-2 電子物性

GaNの  $\Gamma$  点近傍のバンド構造の概略を図 2・20 に示す. 直接遷移型であり,室温で 3.437 eV (波長約 361 nm に相当), 0 K で 3.510 eV (353 nm)の禁制幅をもつ. 価電子バンドは,二 重に縮退した三つのバンド, すなわち,重い正孔(HH)バンド,軽い正孔(LH)バンド,結晶 場分裂正孔(CH)バンドに分裂している. この原因は, $\Gamma$ 点頂上で六重に縮退した価電子帯が, 六方晶系に特有の結晶場の影響により,四重に縮退した  $\Gamma_5$  と二重に縮退した  $\Gamma_1$  に分裂し,



晶ウルツァイト構造(ハ)

更に、スピン軌道相互作用により  $\Gamma_5$  が二重に縮退した  $\Gamma_5$ (HH) と  $\Gamma_7$ (LH) に分裂し、 $\Gamma_1$ が  $\Gamma_7$ (CH) になるためであ る<sup>1)</sup>. 起源から明らかなように、HH-LH 間、及び (HH, LH)-CH 間の分裂を記述する重要なパラメータは、それぞ れ、スピン軌道相互作用エネルギー ( $\Delta_{so} = 17 \text{ meV}$ ) と結 晶場分裂エネルギー ( $\Delta_{CR} = 10 \text{ meV}$ ) である (ただし、こ れらエネルギーは、バンド間エネルギーの差そのものでは ない). 伝導帯、HH、LH、及び CH バンドにおける電子あ るいは正孔の有効質量は、c 軸に平行方向と垂直方向に よって異なっている. **表 2·6** に Γ 点近傍での値をまとめた. これら有効質量は、c 軸に平行な HH を除いて、強い波数 あるいは歪依存性をもっていることから、状況により適当 な値を選択する必要がある.

光学遷移は、伝導帯-HH バンド間は c 軸垂直偏 光のみ許容, LH バンドについては c 軸垂直・平 行偏光とも許容, CH バンドについては c 軸平行 偏光のみ許容である。発光の場合は最もエネル ギーの低い伝導帯-HH バンド間遷移が支配的と なるため, GaN からの発光は、ほぼ c 軸垂直方向



**図 2・20** GaN のバンド構造の 概略

**表 2·6** GaN中の電子及び正孔のΓ点近傍 での有効質量(単位:電子の静止質量)

	電子	HH	LH	CH
// c	0.21	1.89	0.33	0.21
$\perp c$	0.20	0.26	0.38	0.58

に偏光している.光学遷移には、伝導帯電子と価電子帯正孔がクーロン力により結合して形成された励起子が主要な役割を果たす.HH 励起子の束縛エネルギーは、実験的には18~28 meV 程度であると見積もられている.理論的には、例えば、変分法において六方晶系の結晶 異方性を考慮すると<sup>3</sup>、27 meV と計算でき、実験結果をよく再現する.

結晶の歪みがもたらすバンド構造の変化は、歪と変形ポテンシャルによって記述され、実 験的には、励起子反射スペクトルとX線回折による歪評価から変形ポテンシャルが同定され ることが多い.しかしながら、従来、ヘテロエピタキシャル膜で評価がなされていたため、 貫通転位や残留歪により本来の特性が見えにくくなっており、報告値にばらつきも大きい. 信頼性の高いデータを得るために、無歪で欠陥の少ないバルク結晶を用いた研究が待たれる.

伝導度は、n型は Si, p型は Mg の添加により制御可能である.ドナー準位は実験的に約 30 meV であることが報告されており,有効質量近似による計算結果もそれを支持する.一方, アクセプタ準位は正孔濃度依存性を示すことが知られている.これは,図2・20 に示した価電 子構造に起因しており,正孔濃度が増したときフェルミ準位が電子のエネルギー的に下がる ため, HH だけではなく LH の寄与も考慮しなければならないためである.

- J. L. Birman, "Polarization of fluorescence in CdS and ZnS single crystals," Phys. Rev. Lett., vol.2, pp.157-159, 1959.
- 物性値は, I. Vurgaftman and J. R. Meyer, "Nitride semiconductor devices," Wiley-VCH, Weinheim, 2007. Chap.2.からとった.ただし、一部の物性値については、この参考文献の物性値を用いて計算した.
- R. W. Keyes, "Hydrogen-like impurity states in axially symmetric crystals," IBM J. Res. Dev., vol.5, pp.65-66, 1961.

## 2-12 InGaN, AlGaN

室化物化合物半導体 InGaN 及び AlGaN は, ての発光素子において重要な材料である.また,AlGaN については,パワーエレクトロニ クスへの展開も注目されている.図2・21 に, InN, GaN 及び AlN によって構成される混晶 系材料の格子定数と禁制帯幅の関係を示す.

### 2-12-1 InGaN

InGaN は可視全域をカバーする材料で,発 光ダイオード(LED)は近紫外から緑色領域 で、レーザーダイオード(LD)は近紫外から 青色領域ですでに実用化されている.青色 LEDの発光の外部量子効率は75%にも達し ている<sup>1)</sup>.更に,青色LEDと黄色発光する蛍 (執筆者:船戸 充) [2010年6月受領]

窒化物化合物半導体 InGaN 及び AlGaN は,前節の GaN とともに,紫外から可視域にかけ



される混晶の格子定数と禁制帯幅の関係

光体を組み合わせた白色 LED の効率は 169 lm/W と蛍光灯のそれをはるかに凌駕しているこ とから<sup>1)</sup>,次世代照明用光源として重要なデバイスであると考えられている.このように産 業応用は円熟期を迎えつつあるが、物性の理解はまだ十分とは言いがたい. InGaN を構成す る二元化合物, InN と GaN (2-11 節参照)のうち, InN の結晶成長が、バルクはもとより薄 膜もまだ発展途上にあるため、その物性に未知なものが多いことが原因である.

InN は、GaN と同じ六方晶系のウルツァイト構造をとり、格子定数は、室温において c = 0.5703 nm, a = 0.3545 nm である. Г点近傍のバンド構造は、GaN と同様である. 禁制帯幅は、 従来 LCAO 法によって 1.8 eV 程度であると予測され、それを支持する実験データも報告され ていた. しかし、結晶成長技術の進展により、最近、室温で 0.61 eV (波長 2.0  $\mu$ m に相当)、 0 K で 0.69 eV (1.8  $\mu$ m) であることが分かってきた. 従来の半導体の常識では、物性は第一 近接の結合 (InN の場合は In-N 結合) により支配されているが、InN の場合は、第二近接の In-In 間の強い相互作用が第一原理計算により指摘されており、それが物性予測を困難にして いる.

InN と GaN の禁制帯幅から予想されるように, InGaN は可視全域をカバーする. 混晶の禁 制帯幅のボーイングについては, 禁制帯幅の見直しにともない再検討が進んでいるが, 報告 値にはばらつきが大きい (1.3~2.7 eV). また, InGaN を用いた発光素子は, 通常, InGaN を GaN でサンドイッチした量子井戸構造を基本とする. したがって, 重要なパラメータの一つ は, バンドオフセットであろう. InN と GaN のヘテロ構造はいわゆるタイプ I 型であり, そ の価電子帯オフセットは 0.5 eV であるとされている. もう一つ重要なパラメータは歪である. 格子定数から分かるように GaN と InN の格子不整合度は約 11 %であるから, GaN にコヒー レント成長した InGaN 量子井戸は, 大きな二軸性圧縮歪を内包している. その影響は, (1) 発光波長を長波長化するために In を増やすと結晶品質が劣化する, (2)特に(0001)面上に作 製した量子井戸では、歪によって誘起されたピエゾ分極が電子と正孔を空間的に分離するため、両者の再結合確率、すなわち発光の内部量子効率が低下する、(2)'関連して、歪とピエ ゾ分極を関係付ける圧電定数テンソルが不明であるためピエゾ分極の定量が難しい、(3) InN の変形ポテンシャルが不明であるため、歪みのバンド構造への影響を定量できない、など多 岐に及ぶ.(2)や(3)に関しては、最近、(0001)面に加えて、半極性・無極性面上の InGaN/GaN 量子井戸の研究が進展しており、これら様々な面方位上での物性評価が進展すれば、歪とそ の結果として現れる物性を結び付ける圧電定数テンソルや変形ポテンシャルなどのパラメー タの同定にも寄与すると期待される.

### 2-12-2 AlGaN

AIN の禁制帯幅は、室温で 6.00 eV (波長 207 nm),0K で 6.10 eV (203 nm) である.した がって、AIN と GaN による混晶である AIGaN は、200~350 nm の波長域を担うことができ、 殺菌・消毒、フォトリソグラフィーなど、現在のところガス系光源が用いられている応用分 野への展開が期待されている.研究室レベルでは、330~340 nm での LD や、227 nm で発光 する LED が開発されている.一部市販品もあるものの、それらの特性は InGaN 系に比べて 不十分であり、LED、LD とも現在も精力的に研究が進められている.また GaN とのヘテロ 構造では、ピエゾ分極誘起の二次元電子ガスがヘテロ界面に形成されることが知られており、 電子デバイス応用も進んでいる.

結晶構造は六方晶系のウルツァイト構造である.構成要素である AIN の格子定数は、室温 において c = 0.4982 nm, a = 0.3112 nm である. イオン性が大きいため格子の理想からのずれ が大きく、Ackは大きな負の値(-227 meV)となる. その結果、価電子バンドが、上から順 に CH, HH, LH と, GaN や InN とは全く異なる並びになることが特徴である. 前節で述べ たように、伝導帯-CHバンド間の光学遷移は、c軸平行な偏光に対して許容であるから、結 晶成長上有利な(0001)面を使う限り、AIN や Al 組成の大きな AlGaN からの表面発光は困難 であることを意味する.この問題を回避するために、(0001)面以外の面方位(半極性・無極 性面)の利用や、歪及び量子閉じ込めを利用した偏光制御が提案されている、後者について 具体的には、二軸性圧縮歪を印加し、極薄い量子井戸を採用することにより c 軸垂直偏光が 促進されることが理論的・実験的に示されている、この条件は、発光素子の基本構造が、 AlGaN/AlN など圧縮歪系の量子井戸であることから比較的容易に実現可能であり、実際に上 記の 227 nm 発光する LED でも利用されている. 今後, 特に 200 nm 台前半の波長域でデバイ スを開発するに当たり、最大のネックとなるのは正孔密度であろう. Al 組成を増して短波長 化していくに従い、アクセプタ準位が原理的に深くなるため、例えば GaN と AIN で同程度 の Mg アクセプタが添加できたとしても、AIN における正孔密度は GaN のそれと比べて 6 桁 小さくなることが予測されている.不純物種,素子構造などでブレークスルーが必要であろう.

- Y. Narukawa et al., "Imporvement of luminous efficiency in white light emitting diodes by reducing a forward-bias voltage," Jpn. J. Appl. Phys., vol.46, pp.L963-L965, 2007.
- 2) 物性値は, I. Vurgaftman and J. R. Meyer, "Nitride semiconductor devices," Wiley-VCH, Weinheim, 2007. Chap.2 からとった.

## 2-13 Zn0

(執筆者:藤村紀文) [2010年6月受領]

ZnOは、安価で毒性がない白色粉末であるため白色顔料のほか、ゴムの加硫促進剤や医療・ 化粧品・歯科材料としても用いられている. エレクトロニクス用途としては、電子感光体、 紫外線防止ガラス、バリスタ、圧電性を利用した表面弾性波フィルタなど多くのアプリケー ションに利用されてきた. 透明導電膜としても古くから研究例があるものの、導電率で ITO (In-Sn-O)に比して優れた材料開発が難しく実用化は見送られていた. しかしながら、太陽 電池や薄型ディスプレイの市場が 10 兆円に届く時代となり、元素戦略も相まってドナーを ドーピングした ZnO の研究が急激に進められている. また、ZnO は 59 meV と大きな励起子 結合エネルギーを有するため、励起子発光や p 形化に関する研究が 1970 年代に進められた. この分野においても GaN 系物質の代替として 1990 年後半から研究が再加熱している<sup>1)</sup>.

本節では、このようにまさにリバイバルである"半導体としての ZnO"に関して概論する.

### 2-13-1 Zn0 の基礎物性とその結晶成長

ZnO はΓ点にバンド端を有する直接遷移型半導体である. sp<sup>3</sup>混成軌道を有する共有結合性 結晶であるものの,酸素の起分極力によって強いイオン性を有する. その点群 6mm は,中 心対称性をもたず極性を有するため, ZnO は圧電効果や電歪効果を示す. また,凝集エネル

ギーが大きく,その異方性は大きい.その結晶構造, 結晶パラメータと電気・光学・熱的物性を表 2·7 に 示す.

ZnO の単結晶育成に関しては、発光材料用ホモエ ピタキシャル基板として、また InGaN 用格子整合基 板として開発されている.常圧においては高温で分 解するため、融液からの成長が困難であり、大型単 結晶の育成としては、Skull Melting 法、化学気相輸 送法 (CVT),水熱合成が用いられている。不純物の 混入が少なく良質の結晶育成が可能である CVT 法 では、直径2インチ、厚さ1cm程度のものが150時 間かけて育成されており、電子濃度は~10<sup>16</sup> cm-3程 度である、電子移動度は、室温において 205 cm<sup>2</sup>V<sup>-1</sup>s<sup>-1</sup> であり 50 K 近傍まで増加し, 最大値およそ 2000 cm<sup>2</sup>V<sup>-1</sup>s<sup>-1</sup>を示した後にイオン化不純物散乱によって 低温では大きく減少する<sup>2)</sup>. 大型化及び量産に適し た水熱合成においては、世界中で開発競争が進んで いる、水熱合成法では、鉱化剤である LiOH や KOH の使用による Li や K 残留不純物の問題が危惧され ている. Li の濃度はおよそ~10<sup>17</sup> aoms/cc である. ま た, 基板の熱処理によって Li 濃度は~10<sup>15</sup> aoms/cc,

表2.7 ZnOの諸物
-------------

結晶構造	ウルツ鉱型
点群 (空間群)	$6$ mm ( $P6_3mc$ )
格子定数	a=3.2495Å c=5.2069Å
結合長	$d_c=1.987 \text{ \AA} \\ d_{ab}=1.974 \text{ \AA}$
ー結合あたりの 凝集エネルギー	1.89 eV
電子の有効質量	$m_{e''} = 0.23$ $m_{e\perp} = 0.21$
ホールの有効質量	$\begin{array}{c} m_{e\!/\!/}\!\!=\!\!0.23 \\ m_{e\perp}\!=\!\!0.21 \end{array}$
バンドギャップ エネルギー	3.37 eV @r.t.
電子移動度	440 cm <sup>2</sup> V <sup>-1</sup> s <sup>-1</sup> @ r.t.
誘電率	$\begin{array}{l} \epsilon_{0/\!/} = 8.49, \epsilon \hbox{, }                                  $
圧電定数	$e_{31}$ = -0.51 C/m <sup>2</sup> $e_{33}$ = 1.21 C/m <sup>2</sup>
励起子結合 エネルギー	59 meV
比熱	0.14 cal/g/°C
熱伝導度(W/cm/K)	1.16 (Zn face) 1.10 (O face)

またエッチピットも 80 cm<sup>-1</sup>まで減少させることができる.-c 面では, Li と同程度の濃度の Al や Fe が確認されている<sup>3)</sup>.

これらの単結晶の開発は高品質エピタキシャル薄膜成長を可能にし,ZnO半導体のデバイ ス化にとって重要な技術である.しかしながら,高品質ホモエピタキシャルZnO薄膜の研究 例は,基板価格と基板表面処理の問題に起因してそれほど多くない<sup>2)</sup>.一方,ヘテロエピタ キシャル成長に関しては極めて多くの研究例がある.サファイア基板上への成長に関しては、 18%にも及ぶ格子ミスマッチと強い結合エネルギーによって生じる成長の異方性によって 様々な問題が生じる.これらは,気相中の飛来粒子の結合状態の制御やA面基板やバッファ 層の利用によって大きく改善され<sup>4)</sup>,また極性の制御も可能<sup>5)</sup>になっている.また,ミス フィットが極めて小さい(0.09%)ScAlMgO4 基板の利用によって超高品質へテロエピタキ シャル成長膜が得られ<sup>6)</sup>,ZnO単結晶薄膜の物性に関する理解は大きく進んだ.

ZnO 薄膜は, 200 ℃ 以下の低温で比較的高品質の c 軸配向膜を得ることができる.した がって,太陽電池などの安価な低温プロセスが求められる分野への用途にも大きな期待が寄 せられる.大気圧 CVD<sup>7</sup>,ゾルゲル法<sup>8</sup>,電気化学成長<sup>9</sup>を用いた低温成長に関して精力的 に研究が推進されている.

#### 2-13-2 Zn0 の電気特性: 不純物とキャリア制御

ZnO は通常 n 形を示し,ホールドーピングが非常に困難である.したがって,単結晶やエ ピタキシャル膜を用いて,伝導特性に及ぼす不純物やドーピングの影響が調べられるととも に,導電性の制御が試みられてきた.そのイントリンシックなドナーの起源は,長い間,酸 素欠損や過剰 Zn といわれてきたが,高品質単結晶を用いた電子スピン共鳴実験と密度汎関 数計算の最近の結果から,酸素欠損は実際にはディープドナーであり n 形伝導には寄与しな いこと(過剰 Zn やアンチサイト Zn も同様)が明らかになっており<sup>10</sup>,格子間水素や酸素と 置換した水素の影響が議論されている<sup>11)</sup>.これらの不純物の議論は,透明導電膜や p 形ドー ピングに対して非常に重要である.

p形ドーピングも極めて多くの研究が遂行されているものの,(1)n形の起源がようやく分かり始めた,(2)現状で知られている点欠陥がn形伝導に寄与するわけではなくp形ドーピングを補償する,(3)浅いアクセプタの候補がほとんどないこと,などによってデバイス化への道のりは厳しい. 膜厚方向のキャリア濃度分布がキャリアタイプの決定に間違った解釈を引き起こしている場合も多い. Li, Na, K は Zn と置換して深いアクセプタとなるか格子間ドナーとなる. Cu, Ag, Au (Zn 置換), P, As, Sb (O置換) は深いドナーとなりp形伝導には寄与しない. 酸素が電気陰性度の高い元素であるので,窒素との置換が唯一浅いドナーになり得る. 再現性,安定性のある実験として,窒素の低温ドーピングと高温アニールと ZnO 成長を繰り返す反復温度成長法をあげておく<sup>12)</sup>.

#### 2-13-3 Zn0 の光学特性: 励起子発光とパンドエンジニアリング

ZnO はキャリアの有効質量が大きく誘電率が小さいために励起子束縛エネルギーが 59 meV と極めて大きい. A 励起子と C 励起子の束縛エネルギーはそれぞれ 59,49 meV 程度で あることが実験的に確かめられている.量子井戸構造などによって励起子束縛エネルギーは 115 meV まで増加する<sup>13)</sup>.この大きな励起子束縛エネルギーは電子とホールのポーラロン質

量を取り入れても説明できず,励起子のボーア半径がポーラロン半径と同程度まで小さくなり,実効的な誘電率が小さくなる効果と励起子とポーラロンが格子変位を打ち消す効果を取り入れなければならない<sup>14)</sup>.光励起によって,室温での励起子機構による誘導放出とレーザー発振<sup>15)</sup>、高温での励起子分子の形成<sup>16)</sup>などが示されている.

量子井戸構造を作成するために ZnO のバンドエンジニアリングは極めて重要な技術である. バンドギャップのワイド化に対しては, Mg や Be との置換が利用できる. Mg の場合 50 at % 近傍まで岩塩型構造に変化することなく置換できることが明らかになっている<sup>18)</sup>. このときのバンドギャップは 4.5 eV である. 一方, ナローギャップ化には Zn サイトの Cd 置換が用いられ Cd 組成 7 at % ( $E_g$  = 3.0 eV) のものが得られている<sup>19)</sup>.

ZnO を用いた LED では, p 型層に SrCu<sub>2</sub>O<sub>2</sub>を用い 382 nm の発光を確認した報告がある<sup>20)</sup>. また, ZnO ホモ接合を用いた例では,前述の反復温度成長法を用いて,紫-青の発光を確認 している<sup>21)</sup>. 量子井戸構造の実験結果は,紙面の都合上,文献 17) を参照されたい.

## 2-13-4 ZnO を用いた電子デバイス

ZnO を用いた電子デバイスは GaN 系や SiC 系材料と同様,高温動作のパワーエレクトロニ クスに向けて期待できるものの, p 型化が困難であることと残留不純物濃度が大きいことに よってその開発は大きく遅れている.しかしながら,透明トランジスタや移動度 14000  $cm^{2}V^{-1}s^{-1}$ を超える HEMT,量子ホール効果が確認されており<sup>22</sup>,酸化物エレクトロニクスの 新たな展開に向けて ZnO 半導体が先頭を走っている.

- 1) C. Jagadish et al. (ed), "Zinc Oxide Bulk, Thin Films and Nanostructures," Elsevier, New York, 2006.
- 2) D. C. Look et al., Solid State Commu., vol.105, p.399, 1998.
- H. Kato et al., Jpn. J. Appl. Phys., vol.42, p.L1002, 2003; S. Heinze et al., J. Cryst. Growth, vol.308, p. 170, 2007.
- N. Fujimura et al., J. Cryst. Growth, vol.130, p. 269, 1993; K. Nakahara et al., Jpn. J. Appl. Phys., vol.40, p. 250, 2001.
- 5) S. Fong et al., Appl. Phys. Lett., vol.77, p. 3571, 2000; H. Kato et al., Appl. Phys. Lett., vol.84, p. 4562, 2004.
- Tsukazaki et al., Appl. Phys. Lett., vol.83, p. 2784, 2003; A.Ohtomo, Semicond. Sci. Technol., vol.20, p. S1, 2005.
- 7) H. Nishinaka et al., Jpn. J. Appl. Phys., vol.46, p. 6811, 2007.
- 8) T. Nagase et al., Jpn. J. Appl. Phys., vol.40, p. 6296, 2001.
- 9) M. Izaki et al., Appl. Phys. Lett., vol.68, p.166, 1996; A. Ashida et al., Thin Sold Films, vol.517, p.1461, 2008.
- A. Janotti et a., Appl. Phys. Lett., vol.87, p.122102, 2005; Phys. Rev. B, vol.75, p.165202, 2007; L. Vlasenko et al., Phys. Rev. B, vol.71, p.125210, 2005.
- 11) G. Walle, Phys. Rev. Lett., vol.85, p.1012, 2000: A. Janotti et al., Phys. Rev. B, vol.79, p.165210, 2009.
- 12) A. Tsukazaki et al., J. Appl. Phys., vol.81, p.235, 2002.
- 13) H. Sun et al., J. Appl. Phys., vol.91, p.1993, 2002.
- 14) J. Pollmann et al., Phys. Rev. B, vol.16, p.4480, 1977.
- P. Zu et al., Solid State Commun., vol.103, p.459, 1997; D. Bagnall et al., Appl. Phys. Lett., vol.70, p.2230, 1997; Z. Tang et al., Appl. Phys. Lett., vol.72, p.3270, 1998.
- 16) H. Ko et al., Appl. Phys. Lett., vol.77, p.537, 2000.
- 17) T. Makino et al., Semicond. Sci. Technol., vol.20, p.S78, 2005.

- 18) T. Takagi et al. Jpn. J. Appl. Phys., vol.42, p.L401, 2003.
- Appl. Phys. Lett., vol.85, p.4929, 2004; Phys. Stat. Sol. (b), vol.229, p.887, 2002; Phys. Stat. Sol. (c), vol.3, p.960, 2006.
- 20) H. Ohta et al., Appl. Phys. Lett., vol.77, p.475, 2000.
- 21) A. Tsukazaki et al., Nature Material, vol.4, p.42, 2005; Jpn. J. Appl. Phys., vol.44, p.L643, 2005.
- 22) Appl. Phys. Lett., vol.82, p.733, 2003; Science, vol.315, p. 388, 2007; APEX, vol.1, p.55004, 2008.
- そのほか全般的な解説として、Ü. Özgur et al., J. Appl. Phys., vol.98, p.041301, 2005. があげられる.

## 2-14 ZnSe

(執筆者:中田博保) [2010年6月受領]

### 2-14-1 結晶構造

ZnSe は黄色で比較的柔らかい材料であり, II-VI 族半導体の一種で結晶構造は閃亜鉛鉱構 造である.格子定数は 5.6681 Åでありイオン性が 0.34, 屈折率は 2.8 である. 結晶方位が異 なる領域が共存する双晶を形成することがある.

### 2-14-2 バンド構造

直接遷移型半導体で伝導帯の底と価電子帯の頂上はともに $\Gamma$ 点に存在する. バンドギャップは室温で 2.67 eV, 4.2 K では 2.82 eV である. 理論的には経験的擬ポテンシャル法によって 計算が行われている<sup>1)</sup>. スピン軌道相互作用は 0.43 eV である. GaAs 基板上に成長された ZnSe では格子不整合のため応力によって価電子帯の頂上の縮退が解ける.

### 2-14-3 基礎物性

電子の有効質量は 0.145, 重い正孔の有効質量は 1.04 で、マイクロ波と遠赤外光のサイク ロトロン共鳴によって観測されている<sup>2), 3)</sup>.また、ポーラリトンの実験から求められた軽い 正孔の有効質量は 0.60 である<sup>4)</sup>.価電子帯のバンドパラメータはいくつかのグループにより 観測されているが、その一例は  $\gamma_1 = 4.3$ ,  $\gamma_2 = 0.59$ ,  $\gamma_3 = 1.34$  である<sup>5)</sup>.イオン性があるため ポーラロン効果によって有効質量は大きくなっている.結合定数  $\alpha$  は 0.42, LO フォノンの エネルギーは 31.8 meV である.フォトルミネッセンスの測定では低温で励起子、束縛励起子 などの発光線が観測され、試料中の不純物の評価に利用される.束縛励起子が輻射再結合す るとき残された不純物に束縛された電子または正孔が励起される 2 電子遷移が起こる.この とき発光線は励起エネルギーだけ低エネルギー側に観測されるため、1s から 2s への遷移な どに相当する励起エネルギーを求めることができ、不純物のイオン化エネルギーを計算でき る.アクセプタとドナーのイオン化エネルギーは**表 2・8,表 2・9** のとおりである.

	夜2・8 アクセノタの1オノルエネルキー [mev] <sup>m</sup>						
Li	Na	Cu	Ag	Au	N	Р	As
104	126	650	430	~550	100	~85	~110

**長2・8** アクセプタのイオン化エネルギー〔meV〕<sup>6,7)</sup>

表2・9 ドナーのイオン化エネルギー [meV]<sup>8)</sup>

В	Al	GA	In	F	Cl	Li
25.6	25.6	27.2	28.2	28.2	26.2	~21

励起子の結合エネルギーは 17 meV であり、室温では存在しない. 強励起のフォトルミ ネッセンスでは励起子分子,励起子・励起子散乱や電子正孔プラズマによる発光線が観測さ れている.励起子分子の結合エネルギーは 3.5 meV と小さく,束縛励起子と同様かなり低温 で観測される.赤外吸収により不純物の準位間の遷移が観測され、塩素やヨウ素のようなド ナーとリチウムアクセプタのイオン化エネルギーが正確に求められている<sup>9,10</sup>.

#### 2-14-4 作製方法

薄膜試料は、GaAs または ZnSe の基板の上に MBE または MOCVD によって作ることがで きる.n形試料は塩素のドーピング,p形試料は窒素のドーピングによって作られるが,p形 を作るのが困難であった.初期の頃はリチウムやナトリウムなどのアルカリ金属がドーパン トとして利用されたが,最終的には窒素が使われるようになった.窒素はプラズマを用いて ドーピングされた.アルカリ金属を用いたときにp形が作製しにくい原因として同時にド ナーができる自己補償効果が提案された.

### 2-14-5 応 用

バンドギャップが青色の波長に相当するため青色発光素子として注目された. GaAs 基板 との格子不整合が 0.26%と小さいが,格子整合を正確にとるため ZnSSe,更にバンドギャッ プを大きくするため ZnMgSSe が用いられた. 1991年,アメリカの 3M 社で ZnSe を用いた青 緑色の電流注入型半導体レーザーが開発された.その後,安定な発光が得られずに GaN にそ の役割が代わった.レーザーのしきい値電流は低かったが,イオン性が大きく材料が脆弱な ため安定な発振が得られなかったと考えられる.

青色発光素子の有力候補としての立場が GaN に奪われた後, 白色 LED の開発が ZnSe を用 いて行われた. ヨウ素をドープした ZnSe 基板の上に ZnSe のエピ膜を成長させるホモエビの 構造であった.エピ膜で青色発光が起こり,青色の光によって基板で黄色の発光が生じ,あ わせて白色が生じる.寿命の問題も改善され, GaN の白色 LED と比較して駆動電圧が低く, 電球の白色に近い白色を出すことができる<sup>11)</sup>.最近ではイオン性が低くより強固な材料であ る BeTe との混晶半導体である BeZnSeTe を活性層とした緑色 LED が開発され 5000 時間以上 の寿命が実現している.基板として InP, n 形クラッド層に MgZnCdSe,活性層に BeZnSeTe, p 形クラッド層に MgSe/BeZnTe 超格子が用いられている<sup>12)</sup>.

波長 0.6 から 10µm 付近まで透明でありかつ潮解性がないことから,赤外の窓材などの光 学部品として使われている.耳に入れて体温を測定する赤外線体温計や,黄色い窓ガラスに も ZnSe は使われている.また,Te をドープした ZnSe はガンマ線や X 線用のシンチレータ として用いられている.

- 1) J. R. Chelikowsky and M. L. Cohen, Phys. Rev. B, vol.14, p.556, 1976.
- 2) T. Ohyama et al., Jpn. J. Appl. Phys. vol.23, p.L382, 1984.
- 3) T. Ohyama et al., Jpn. J. Appl. Phys., vol.26, p.L136, 1987.
- 4) S. Lanks et al., J. Appl. Phys., vol.80, p.4049, 1996.
- 5) H. Venghaus, Phys. Rev. B, vol.19, p.3071, 1979.
- 6) T. Yao et al., Jpn. J. Appl. Phys., vol.22, p.L144, 1983.
- 7) K. Yoneda et al., Appl. Phys. Lett. vol.45, p.1300, 1984.
- 8) H. Okuyama et al., Jpn. J. Appl. Phys., vol.30, p.L1620, 1991.
- 9) H. Nakata et al., Appl. Phys. Lett., vol.74, p.3480, 1999.
- 10) H. Nakata et al., Phys. Rev. B, vol.60, p.13269, 1999.
- 11) 高橋 清(監修), "ワイドギャップ半導体光電子デバイス,"森北出版, p140, 2006.
- 12) 岸野克巳, 応用物理, vol.78, p1029, 2009.

## 2-15 CdS, CdSe

(執筆者:金 大貴) [2010年6月受領]

**II-VI** 族半導体である CdS, CdSe は可視光用の光導電セルとして広く利用されており,通称 CdS セルと呼ばれている.また,CdS は CdS/CdTe

薄膜太陽電池や CIS 薄膜太陽電池のバッファ層と して用いられている.本節では, CdS, CdSeの結晶 構造,バンド構造と光学遷移選択則などについて述 べる.

#### 2-15-1 結晶構造

CdS, CdSe はウルツ鉱型の結晶構造をもつ直接遷 移型半導体である (図 2・22). *a* 及び, *c* はそれぞれ, [1000] 方向及び [0001] 方向の格子定数を示す. CdS においては *a* = 0.4135 nm, *c* = 0.6749 nm, CdSe にお いては *a* = 0.4300 nm, *c* = 0.7011 nm である<sup>1)</sup>.



図 2·22 ウルツ鉱構造 (CdS)

### 2-15-2 バンド構造と光学遷移選択則

CdS (CdSe)の伝導帯は Cd の s 軌道, 価電子帯は S (Se)の p 軌道から構成されている. 図 2・ 23 は Γ 点近傍のバンド構造の模式図を示している.  $\Delta_1$ はスピン-軌道相互作用による分裂エ ネルギーを表し,  $\Delta_2$ は結晶場分裂エネルギーを表す. 結晶場の異方性のために価電子帯は  $\Gamma_5$ 価電子帯と  $\Gamma_1$ 価電子帯に分裂する (図 2・23 (a)). 更に, スピン-軌道相互作用を考慮すると ( $\Delta_1$ ), 価電子帯は  $\Gamma_9$ ,  $\Gamma_7$ ,  $\Gamma_7$ 価電子帯に分裂する (図 2・24 (b)). 分裂した三つの価電子帯 は A, B, C バンドと呼ばれている. 伝導帯は  $\Gamma_7$ である.

 $\Gamma_9$ 価電子帯と $\Gamma_7$ 伝導帯間の光学遷移選択側は $E \perp c$  偏光のみ許容(E//c 偏光は禁制)である. また、 $\Gamma_7$ 価電子帯と $\Gamma_7$ 伝導帯間の光学遷移選択側は $E \perp c$ 、E//cのいずれも許容である. CdS、CdSeの室温におけるバンドギャップエネルギー( $E_c^A(\Gamma_{7c},\Gamma_{9v})$ )はそれぞれ 2.48 eV、1.73



図 2・23 「点近傍のバンド構造の概略図

eV である <sup>1)</sup>.

次に、Γ 点近傍の励起子状態について述べる. 価電子帯の正孔は、クーロン相互作用により伝 導帯の電子と結合して励起子状態を形成する. A, B, 及び C 価電子帯の正孔と Γ<sub>1</sub>伝導帯の電 子からなる励起子は、それぞれ A 励起子, B 励 起子,及び C 励起子と呼ばれている. A, B, 及び C 励起子はワニエ型励起子であり、そのエ ネルギーは近似的に水素原子型系列を有する<sup>2)</sup>.

## 2-15-3 混晶半導体

半導体混晶系では,混晶比の大きさによってバ ンドギャップエネルギーを広い範囲にわたって 変化させることができる. 図 2・24(a)は, いく つかの混晶のバンドギャップエネルギー ( $E_g$ ) と格子定数 (a) の関係をまとめたものである. 一例として, 図 2・24(b)に ZnS と CdS の混晶で ある Zn<sub>1-x</sub>Cd<sub>x</sub>S のバンドギャップエネルギーの 混晶比(x) 依存性を示す. Zn<sub>1-x</sub>Cd<sub>x</sub>S におけるバ ンドギャップエネルギーの x 依存性( $E_g(x)$ )は,

 $E_g(x) = (1-x)E_g(\text{ZnS}) + xE_g(\text{CdS}) - bx(1-x)$  (15.1)

で与えられる.ここで、b はボーイングパラ メータと呼ばれ、 $Zn_{1-x}Cd_xS$  における値は b = 0.61である.





## 2-15-4 CdS, CdSe ナノ粒子

近年,10 nm 以下の微小サイズを有する半導体ナノ粒子(量子ドットとも呼ばれる)が大きな注目を集め、様々な分野で研究が行われている.ナノメートルというサイズの有限性のために量子効果が発現し、バルク結晶とは異なる物性・機能を示す可能性があることから、新しい機能性材料として大きく期待されている.特に、溶液中での化学反応を利用した化学的方法により、粒子サイズが均一で、高い発光効率を有する高品位な CdS, CdSe ナノ粒子が作製されている<sup>3</sup>. これら半導体ナノ粒子を対象として、新しい発光材料や太陽電池への応用研究が活発に展開されている.

- 1) O. Madelung, "Semiconductors: Data Handbook," Springer, 2003.
- 2) C. F. Klingshirn, "Semicondctor Optics," Springer, 2006.
- 3) V. I. Klimov, "Semiconductor and Metal Nanocrystals," Marcel Dekker Inc., 2004.